ナチスの地理建設

川上健三著

ナチス叢書

アルス刊

責任編輯

陸軍中將 大島浩閣下・小島威彦

ナチス叢書刊行の言葉

支那事變を契機とする皇道世界維新戰の發展は、これに呼應する第二次大戰により、歐洲全土を獨伊樞軸ブロックと化し、この世界史的轉換は、まさに、英米民主主義共同戰線を結成せしめ、インド、南洋、濠洲、カナダ等全面に亙る對日封鎖陣を形成せしめんとする。ナチス・ドイツは何によつて、かくも壓倒的勝利を獲得したか。これこそヒットラー總統が、日獨伊防共樞軸による、ゲルマン圏の確立によつて實現し得たものであり、しかも今や英本國攻略により、イギリスの植民地分離は、更に新しき世界長期戰に發展せんとする。まさに新興ドイツは、我が日本の國體を研究し、日本精神を體得して、荒廢せんとする舊歐洲に、新しき世界を建設せんとする。

かくてドイツを知ることは、日本を知ることであり、また日本を知ることは、ドイツを把握することである。

本叢書は、この日本―ドイツの緊密なる世界史的關係を認識し、再强化するためにナチス・ドイツの本質を闡明せんとし、併せて、我が日本が何を爲すべきかの焦眉の問題に對する、明確なる解答を與へんとするものである。

序

今次歐洲戰爭に於けるドイツ軍の壓倒的勝利を、機械化部隊、新兵器等の成功に歸するものがある。說明がそこに止まるかぎり、之は全く皮相なる唯物的見解に過ぎない。

「持たざる國」としてのドイツが、「土地なき民」としてのドイツ人が、如何にしてあの莫大なる機械化兵團を短期間のうちに整備することが出來たか、如何にしてあの樣な新鋭なる兵器を作り得たか。又如何にしてその新兵器を自由に驅使し、兵器と一體となつて勇敢に戰ふ優秀なる軍隊を養成し得たか。

寧ろ着意すべきはそれ等の點にある。これ全くドイツの優れたる總力戰體制の確立、而してそれを確立、運用せるナチス世界觀の勝利に外ならない。

ドイツは革命の勃發、戰敗による疲弊混亂により、あらゆる方面に於てあまりにも本來のドイツ的なるものを多く失つた。そしてドイツは社會的政治的經濟的思想的混亂に當面したのであつた。この混亂のうちから、ゲルマン民族の本質を最も深く體驗し、民族に對する絶對的信仰より出發して、祖國ドイツにその失ひたる魂を再びとり戻さんとして起上つたのが實にナチスである。この目的を貫徹せんには、國の內外に亘るあらゆる非ドイツ的なるものゝ克服を必要とした。ナチスはその敵を明瞭に認識し、之が擊破に向つて邁進して行つた。そこには鬪爭なき政治もなければ、鬪爭なき文化も藝術も學問もない。あらゆる部門に於ける非ドイツ的なるものの克服の戰があるのみであつた。政治も經濟も學問も思想も、それ等を悉く「戰ひ」として認識し、その總力を擧げてこの目標に沿うて組織化し、作用せしめ、すべてを一體として舊秩序打倒の戰に向つて邁進して行つたのがナチスであつた。

玆に初めて莫大なる資源が生れ、新兵器が生れ、優秀なる軍隊が生れ、而してまたこの軍隊を隨時隨處に、適切に敏速に運用し得たのである。

ナチスの地理建設も亦この戰ひの一環として考へられねばならない。ナチスの鬪爭の開始せられた當時に於て、現實の世界景觀は英米的秩序によつてまさに編成し盡されんとしてゐた。而かも世界の地理學界は、かゝる現實の世界の忠實なる叙述説明に終始してゐたのみか、寧ろこの景觀を神聖犯すべからざるもの、動かすべからざるものとして觀察し、記述し、分析し、綜合し、説明し、解釋することを以て、得々として合理的科學的研究と稱するに至つてゐたのである。

ナチスがヴェルサイユ體制の桎梏を斷ち切り、祖國ドイツを再建せんには、地理に於けるかかる秩序を打倒することがまた必要であつた。新らしきドイツ地理學界は、その民族主義に基く地理觀に立ち、歪曲せられたる現實の景觀を照破し、從來の地理的詐略を看破して、ゲルマン民族の嚮ふべきところを指示せんとしたのである。カール・ハウスホーファーを中心とするドイツ地政學者達の眞摯なる研究の如きこれである。玆にナチスの新らしき地理建設を見ることが出來る。

最近我が國に於てナチス・ドイツの地政學的研究を紹介する向が相當多くなつて來たことは悅ばしき傾向である。併し乍らこの新らしき地理の根本的意義について觸れてゐるものは、極めて少ない樣に思はれる。この小著に於て企圖したところは、新らしきドイツの地理的建設の根底にあるものを幾分なりとも見出さんとするにあつたが、何分にも淺學菲才なるに加へて、身邊多忙、僅かにその着眼を示し得たに過ぎない。今後の研究に俟つべきところ極めて多い。切に大方の御叱正を請ふ次第である。

昭和十六年五月

著者

目次

目次

ナチスの地理建設

一、惠まれざるドイツの自然

政治に經濟に文化に武力に、目覺しき躍進を遂げつゝあるナチス・ドイツの今日を見る時、人或はドイツの自然の優秀さを想像するかも知れない。

併しドイツの風土は元來決してしかく惠まれてはゐなかつた。

彼の有名なるローマの史家タキツスは、その名著『ゲルマニア誌』に於て、紀元後第一世紀頭のドイツの狀況を次の如くに描寫してゐる。

「誰が亞細亞（小亞細亞）、阿弗利加、或は伊太利亞の地を後にして、土地の荒涼たる、氣候の酷烈なる、風物風俗の凄慘なるゲルマーニアの地を指して急ぐものがあらうか」

と。更にまた

「土地はその姿に幾分の變化はあつても、一般よりすれば森林に蔽はれて物凄いか、或は沼地が連らなつて荒涼たるものであり、しかもガリヤ（Gallia）諸地方に面する方は濕氣が深く、ノリクム（Noricum）とパンノニア（Pannonia）を望む地方は風が强い」

とも述べてゐる。なほその住民の生活を説明してゐる項に於ては

「寒氣と飢餓には其の風土氣候によつて馴らされてゐる」

と如何にも惠まれざるドイツの自然と、それと鬪ふ住民の模樣を巧みなる筆致を以て描寫してゐる。

（註）「ゲルマニア誌」の譯は泉井久之助氏の譯による。「藝文」第二十一年第四號　昭和五年四月掲載。

以上の記事によつてもローマ時代のゲルマニアの自然環境が如何に慘めなものであつたかを、充分推察することが出來るであらう。併しこれはひとりローマ時代ばかりのことではなかつた。現在と雖もドイツは決して自然に惠まれてゐる地・といふことは出來ない。

抑〻ドイツは地形上概ね二つの地理區に區分することが出來る。低原の北ドイツ、高原の南ドイツがこれである。而してその北部を構成する北ドイツ平原はナチス以前のドイツ領域の概ね半ば近き面積を占め、地形圖上では如何にも廣大な肥沃なる平原の如き觀があるけれども、實は地質時代の氷河堆積物によつて被はれた沼澤の多い瘠地に過ぎない。

一體ヨーロッパは洪積世の時代に數回に亘つて氷河によつて被はれた。その分布は比較的廣汎なる地域に及び、スカンヂナヴィア半島を中心とした北歐大陸氷河、アルプス山脈を中心としたアルプス氷河等があつた。またその外に局部的にはカルパチヤ山脈や、中央フランスのオーベルニュ、カンタル等の高地にも認められた。北ドイツ平原はスカンヂナヴィア方面より流れて來たこの第一の氷河によつて廣く被はれ、堆石(モレイン)の限界はエッセン、ハルツ、ザクセンの南にまで達してゐる。その結果氷河の漂土又は堆石は廣く北ドイツの平野を被覆し、氷河湖は到る處に生じた。而も氷河がその末端に殘した端堆石(Endmoränen)は斷續彎曲した丘陵地をなして平野の東西にいくつにも連なつてゐる。

かゝる土地が耕作にとつて良好でないことは勿論である。殊に氷河の殘留物たるこれ等の堆石や砂礫は、耕地を作る爲には出來るだけ取除かねばならない。實際ドイツ人達は今のドイツに定着して故郷と感ずる樣になつた第九世紀の頃から之を除去し始めて、今日まで營々として努めてゐるが、而も尙ほ取り盡せない狀況である。

靑山一郎氏はその名著『獨逸の砂』の冒頭に、この惠まれざる北ドイツ平原を次の如くに述べて居られる。

「……この大氷河はその不斷の流に石と砂とを運んで、今日の獨逸を作り成したと云はれてゐる。此砂こそは獨逸を語る上に見逃す事の出來ないものなのである。白く瘦せた砂地には赤松・樫(カシハ)・ブナ・白樺と云つた木々が單調に生ひ茂つて、其處には獨逸人一流の營々たる農作によつてさへも、馬鈴薯すら三年に一度位しか氣の利いた收穫を得られないのである。……その砂に覆はれた平原の中に、とりわけ土の瘦せた水氣の少い地帶がある。その荒野原が卽ちハイデ (Heide) である。而もそのハイデには何十粁四方と云ふ恐ろしく大きなものがある。其處

には白い砂が所々に露はれて、稀には氷河が運んで來たと云ふ巨岩（フインドリング）が、靜に千古の冷い謎を横へて居る。草は辛うじて生え、木々は力なく伸びて居る。名も知らぬ鳥は頻りに飛べど囀る事も稀である。……」

かゝる瘦薄の北ドイツ平原の南には、南ドイツの高原地帶が連なつてゐる。この高原地帶は太古代並びに古生代の岩石から成立し、過去に存在した皺曲山地が、殆どその根本まで侵蝕されてしまつた土地である。永い間の年月に、或は押し上げられ、或は分裂し、或は傾起し、或は陷沒して盆地となつたのみではなく、古代の火山岩の噴出があつて、この地方の基盤をなしてゐた元來の褶曲は全く破壞されて、いかにも複雜を極めた構造になつてゐる。かゝる高原地帶も農耕にとつて餘り適してゐないことは申す迄もない。

ドイツの國土の甚だ惠まれてゐないことは以上の通りであるが、之に加へてその氣候も亦決して良好とは稱し難い。大體がドイツの位置は、日本などに比すれば遙かに北に偏してゐる。ベルリンの如きは北緯五十二度二十七分、ハンブルグは北緯五十三度三十三分といふ高緯度に位

してゐるから、樺太の日露境界線より更に北に横はつてゐるわけである。從つてその氣溫は全般として寒冷となつてゐるが、而も北部に低く、南部に高いドイツの地形は緯度の低まるにつれて生ずる溫度の增加を打ち消し、南部に到るまで氣溫の恩澤に浴せしめてゐないのである。それのみならず南部がアルプスの大障壁を以て限られてゐることは、地中海の影響よりドイツを全く隔絕せしめ、氣候的條件を一層惡くしてゐる。これ等の影響によつて、ドイツの北西海上には大西洋の暖流が流れてゐるにも拘らず、各地の一年間の平均氣溫は、一〇度以上に達するところは極めて稀で、一月の平均氣溫の如きは殆んどすべての地域が氷點以下となつてゐるのである。その上更にドイツの氣候にとつて都合の惡いことは、一年の大半が曇天であり、而も高緯度に位置してゐる爲め、日射量が少いことである。

ドイツの空は九月から翌年の四月迄の間、一般にどんよりと曇つて、殆んど太陽を見ることが出來ない。五月に至つてようやく一陽來復をことほぐことが出來るのであるが、而も北ドイツはこの時期に於ても尙充分な日射量は得られず、且つ太陽を仰ぐことの出來るのは僅に四時

間乃至五時間程に過ぎない。かのゲーテの『ヴィルヘルム・マイスター』の中に出て來る可憐なる少女ミニヨンの歌ふ「君よ知るや南の國」の歌は、實にミニヨンの口を借りて、ドイツ人のすべてが抱く南の國へのあこがれを現はしたものに外ならない。「……光滿ちて惠みあふれ、春は盡きず空は青き……」とは陰慘なるドイツに於ては容易に求めても得られない境地であつた。

以上の如くドイツの自然は一般に甚だ惠まれてゐない。僅かに、氣候もよく、肥沃な冲積平野をなしてゐる西部のライン地溝帶のみが、殆んどその唯一の例外と見ることが出來るであらう。

ドイツ人達は第九世紀の頃よりこの様なドイツの地に定着し、農業に從事することゝなつた。併し乍らその土地は前記の如く氣候的にも、土壤の上からも惠まれてゐなかつた。從つて一定の土地を長く使用することが出來ず、常に耕地を代へる所謂三圃農法(ドライフエルデルヴイルトシヤフト)によらねばならなかつた。而もかゝる農法は住民の多くなかつた當時にあつてこそ可能であつたが、その後次第に

人煙稠密となるにつれ、この耕地を代へる農法も出來なくなつて來た。玆に於てドイツの人達はこの瘦薄なる氷河土壤を、不斷の努力を以て改良して行つた。排水工事を施し、森林を整へ、肥料に注意し、やがてエルベ盆地で作られる人造肥料や、チリ硝石を施して土壤を改良し、ドイツをして世界有數の農產國とすることに成功したのであつた。今日に於ては瘠土の大半は既に良耕地と化し、甜菜をはじめとしてライ麥、燕麥、馬鈴薯等世界の一、二を爭ふ產額にまでこぎつける事が出來、又之に伴ひ甜菜や馬鈴薯の殘滓を以て飼ふことの出來る家畜類の飼養も著しき發達を遂ぐるに至つたのである。

かゝることはドイツ人にしてはじめて爲し得たところであらうが、一方から云へばまた……この痛ましい事實の前に、「獨逸の砂（ドイツチヤザンド）」は何千年の間獨逸人に、勤勉にして重厚な、そして奮鬪的な性格を植ゑつけて來たのである。……(前掲青山氏著書)とも云ふことが出來る。實にドイツ人の沈着にして剛毅、不撓不屈の性格は、その風土の所產ではあつた。併し何としてもドイツ人が如何に營々として血の滲む樣な努力を續けても、地力には限度があり、一方に於て年々

増加して行く人口を、その收穫を以て養ふことは全く容易なことではなかつた。

勿論他面ドイツはヨーロッパの中原とも稱すべき交通上の要衝に位置してゐた。この事は鐵、石炭、加里鹽等の鑛産に比較的惠まれてゐたことと相俟ち、近世になつてからドイツを世界屈指の工業國に躍進せしめた。併しこのことによつてドイツは、その人口を養ふに足るべき糧食のみならず、工業上必要なる原料をも獲得せねばならず、又その製品の販路をも見出さねばならぬ樣になつて來た。

「土地なき民」としてのドイツ民族は、その必然の要求として、生存維持の爲に必要なる生活地域の獲得を以て、年來の念願として來たのであつた。

二、ドイツ統一の困難

以上の如きドイツの生活圏擴大の希望に對し、一つの大いなる障碍があつた。それは國土統一の困難である。

一體ドイツ民族は過去一千年以上に亘り、時に國内に於て、時に外國に對して、祖國統一の爲に戰ひ拔いて來た。實にドイツの歷史は國土統一の努力の歷史であつたとも云ふことが出來るであらう。それにも拘らずその國土は容易に統一を克ち得ることは出來なかつた。ドイツ人は一方に於て、文化の上には名實共にヨーロッパの先頭に立ちながらも、その國土は常に相剋對立を續け、第十九世紀初頭の如きは、國土はナポレオンの馬蹄に蹂躪せられ國民は屈辱的な生活に喘がねばならなかつたのである。

今日ナチス・ドイツは、自らを『第三帝國』と稱してゐる。これは紀元九六二年にオットー一世によつて確立せられた神聖ローマ帝國を以て『第一帝國』、ビスマルクによつて統一せられた帝國を『第二帝國』となすに基くものである。第一帝國はドイツを最初に統一に導いた帝國であつた。然し乍らこの第一帝國も國内には多くの諸侯が割據して皇帝の命令は決して全國に行き亘つてゐたものではなく、近代的な統一國家とは甚だ性質の異つてゐたものであつた。

この神聖ローマ帝國はその後一八〇六年フランスのナポレオン一世によつて亡ぼされるまで、八百年以上も形式上は存續した。併し實質的には帝權は幾許もなく衰退し、その後は諸侯の對立と宗教問題等とが錯綜して政治狀態は紛糾を續け、帝國は僅にその形骸のみを殘してゐたに過ぎなかつたのである。

殊に第十三世紀に於ける成吉思汗戰爭により、神聖ローマ帝國の崩壞は殆んど決定的となり、その後間もなく十八年間にも及ぶ大空位時代（一二五六年ー一二七三年）すら招來したのである。

二、ドイツ統一の困難

第十六世紀に至りかのマルチン・ルッターは宗教改革の叫びをあげたが、これもドイツをローマ教會の羈絆より解放し、紛爭狀態の祖國を統一へ導かんとした一つの運動であつたとも見ることが出來るであらう。併し乍らこれは政治的內部抗爭に加へて、更に宗教上の對立をも生じ、ドイツ國を焦土と化せしめた三十年戰爭を惹起せしむる結果となつた。一六四八年、ウエストファリアの和議によつて、その血腥い戰の結果は漸くつくこととはなつたが、その結果スウィスとオランダとは獨立國となつてドイツより分離し、又ドイツ自身はフランスやスウェーデンに領土を割讓し、爾來ナポレオン時代に至るまで全く無氣力、無統一なる、名ばかりの存在を續けたのであつた。

この間プロイセンの勃興があり、プロイセンを中心とするドイツ統一の基礎を樹立するところがあつたが、普墺の對立拮抗はナポレオンの來襲に遭つては忽ちにして慘敗し、オットー大帝以來の光榮を細々ながらも把持し來つた神聖ローマ帝國も、遂に敢なく崩壞し去つたのである。

その後ナポレオンの壓政に堪へかねたドイツ國民の愛國的熱情は、祖國擁護運動となつて各地に現はれた。かのフィヒテが有名な『ドイツ國民に告ぐ！』を絶叫したのもこの時であり、シュタインがベルリン大學を起し、當代一流の學者を招いてドイツ學界の中心たらしめ、ゲルマン民族の爲め學問の獨立とドイツ國民的觀念の養成を圖つたのも亦この時代であつた。

やがて普、墺兩國は英露と同盟して一八一三年、ナポレオンをワーテルローの戰に擊破することが出來た。併しナポレオン沒落後の前後處置を議したウイーン會議に於て、ドイツ國民の念願としてゐた國土の統一も自由も、相變らず少しも成就せられるところはなかつた。ドイツは依然としてオーストリア、プロイセン、バイエルン等三十五の君主國と四つの自由市とに分割せられ、たゞそれ等がオーストリアを盟主とするドイツ聯邦といふ組織を形成したのみに止まつたのである。爾來ドイツ國民は如何にして他國の壓制よりその自由と統一とをドイツに齎すべきかに再び惱まねばならなかつた。

他國よりの壓制干渉を却け、ドイツ人のドイツとしての自由と統一をドイツ國に確立した人

こそ、實にビスマルクであつた。今日ナチス・ドイツは、前記の如くビスマルクの統一帝國を『第二帝國』と考へてゐる。然し乍らビスマルクの第二帝國も亦必ずしも理想的なる統一國家ではなかつた。ドイツ第一の大國であり、歴史的には常にドイツの代表としての役割を名實共に果して來たオーストリアは全然これから除外せられてゐたと共に、新帝國にあつても尙ほ從來の聯邦制度を完全に克服することは出來なかつた。ドイツ統一と共に從來の聯邦を形成してゐた各國の主權は一應新しい帝國に移されたとはいへ、而も尙プロイセン、バイエルン等各國の國別は全く消滅してしまつたのではなく、各〻從來の國號と君主とを保有し、夫々の政府と議會とを持つて、依然その地方の直接の政治に任じてゐた。而も新帝國は專らビスマルクの所謂鐵血政策の名を以て呼ばれたプロイセンの武力によつて成立したものであつた。强壓の結果の統一であり、そこには多くの無理があつた。南獨地方の各聯邦の如きは元來オーストリアに味方して居り、たゞプロイセンの武力により止むなくその覇權を承認したものに過ぎなかつた。勿論當時に於てはかゝる武斷政策によらねば最早ドイツの統一は不可能であつたとも考へられ

る。併しこのことはやがてその武力の消滅と共に、國家組織の解體せらるべき運命を擔うてゐたのであつた。第一次歐洲大戰に於けるドイツの敗北、革命の勃發はドイツ國内を鼎の沸くが如き混亂に陷らしめたのであつた。

以上の如くドイツ民族は民族的には極めて優れたる文化を有しながら、その民族的優秀性に相應する政治的經濟的地盤を容易に確保することが出來なかつた。之には多くの理由を擧げることが出來るであらう。思想的、殊に宗敎的關係からも、又政治的、經濟的關係からも、それ等を說くことは出來よう。殊に近世に於ては、ドイツの廣地域圈を確保することによる强大を恐れた英、佛等が、ドイツ國内の宗敎上、經濟上、或は政治上の對立關係を機會ある每に巧みに利用し、之を小地域に分割せしむべくあらゆる努力を傾注した點などは、その最も有力なる理由として看過し得ないところであらう。恰も第十八世紀、ドイツが舊敎を代表する南部オーストリアのハプスブルグ家を中心として、漸次統一へと向つて行つた際、之と對抗し得る有力なる勢力として、北方ドイツに新敎を奉ずるホーヘンツオルレルン家を中心とするプロイセン

が急速に勃興して來た事實の如きは、この間の事情を如實に示してゐる一例である。

併し乍ら今それ等の理由を一々詮議立てすることは本書の目的ではない。たゞここに於て一言觸れたいことは、それ等の理由の根底をなすものとしてのドイツの自然環境の影響についてである。

それにはドイツの位置とその地勢とが考へられる。ドイツの位置についてはハウスホーファルは次の如くに説明してゐる。

「ドイツは歐洲に於ける中央の領土(ライヒ)である。これこそドイツの位置にとつて動かすべからざる事實である。ドイツの領土は他の列强のそれの如くいかなる側面も解放されては居らぬ。ドイツの門戸の前には擴大の可能性は些かもない。すべての側面は傳來の大なる文化國によつてとりまかれてゐる。卽ち他の諸强國がドイツを包圍してゐるのだ。……たえずドイツはあらゆる側面の重壓に曝され、たえず大なる隣國(それは敵となる可能性がある)の觸手の延びてゐる所あり、又他の何らかの世界的强國よりも更に一層歐洲の狀態に左右されてゐる。……」

(Haushofer: Die Grossmächte vor und nach dem Weltkriege)

この他國より影響され易い位置にあつたことが英佛等の干渉を引起し、ドイツ國土の統一を困難ならしめて來た點は確かに大きい。併し英佛等がドイツに對し干渉をなし得たのには、更にその根底として國內に干渉され易い間隙を多く包藏してゐたが爲であり、この間隙を生じた根底にはドイツの地形が考へられねばならない。

ドイツの地形は旣に前項に於て述べた如く、北部の低原と、南部の高原とに大別することが出來る。その中で北部の低原は比較的單一な地形をなし、從つて統一せらるべき可能性は多分に存してゐた。プロイセンの比較的强力なる統一を爲し得たのには、かゝる地理的環境が與つて力あつた次第である。之に對し南ドイツは地形極めて複雜であり、多くの小國家を形成する傾向が强かつた。かゝる南北の地形上の相違は、北部が海洋との利害關係深きに對し、南部が全く大陸的環境に生活してゐたことと相俟つて、政治的にも、經濟的にも、また宗教的にも、ドイツの統一を困難ならしめて來たのである。この間隙を巧みに利用したのが英佛であり、こゝに

ドイツ統一の困難さは一層加はつてゐたのである。

要するにドイツ統一の困難なりし理由の根底には、ドイツの自然の拘束性が與つて力ありしことを忘れてはならない。オットー大帝も、ビスマルクも、この自然の制約を根底に於て打ち破ることが出來ずして、遂に滿足すべき統一を實現し得なかつたのである。

かゝる自然的拘束性を克服して、玆に有史以來最初の完全なる統一國家としてのドイツ帝國を實現せしめたのが、實にナチス・ドイツの『第三帝國』であつた。然らば如何にしてナチスはこの自然の拘束を乘越えて統一の彼岸へと到達することが出來たのであらうか。その根底的なるものとしてこゝに世界觀の轉換を考へねばならない。

三、ナチスによるドイツ國土の統一

すべてものには相反する二面がある。しかもこの二面は同時に存在すると共に、別個のものではない。お互ひに含み含まれる關係にあるものである。それは力に於ける「作用」と「反作用」とを考へれば直ちに諒解し得る問題である。作用と反作用とは全く相反する力である。而も作用がなければ反作用もない。作用があつてはじめて反作用が存在し得ると共に、作用があれば必然的に反作用を伴ふ。而して作用が強大となればなる程、反作用も亦これに伴ひ必然的に増大する。作用と反作用とは、兩者全く相反する力でありながら、而もお互ひに含み含まれてゐる關係にあるものに外ならない。

「表」、「裏」といふも之と全く同じ關係にある。表と裏とは全然反對の側にありながら、而

も表がなければ裏は存在しない。又表があれば必然に裏が存在してゐる。かゝる關係にあるにも拘らず、作用と反作用とを相對立する別個の力であるかの如くに考へしめ、表と裏とを切離して表のみによつて萬事を規定付けんとしたところに、近世自由主義の謀略が潜んでゐることを知らねばならぬ。今「海洋」といふ問題を取上げて考へて見る。海洋は一方に於ては確かに遮斷的性質を有してゐる。オーストラリアの人類や動植物が他の大陸と非常に異なつてゐるのも、新大陸が長い間、ヨーロッパ人の地理的知見の外にあつたのも、又洋島中に舊き文化が殘されてゐるのも、海洋が交通上大なる障碍をなしてゐたが爲めである。我が國が不敗の地位に位するといふのも、四圍環海であることが與つて力ありと云ふべきである。有史以前の住民のうちには、海濱乃至は湖岸に近い淺い水中に杭を立てゝ、その上に丸太と樹皮とで小屋を設けて安住の場所としてゐたものもあつた。これも全くこの海の遮斷性を利用して外敵の侵入を防止せんとしたものである。

併し乍ら他方に於て海洋は、陸地の境界が夙に交通や國家の發達を阻んでゐるとき、遮ぎる

ものなく海面の達する限り一様なる狀態で廣々と擴がつてゐる。この海の「均一性」と「廣さ」とは陸地に得られない特色であり、海洋は實に限りなき交通路を人類に開放してゐる。ラッツエルはその『海洋論』に於て、海洋を「民族發展の源泉」と見做し、世界に重きをなさんとせば海と結ばざるべからずと論じ、又海上交通の根本的障碍として擧げられるものは只だ流氷のみであると述べてゐる。(Ratzel: Das Meer als Quelle der Völkergrösse.)

海洋はもし之を渡る舟と、それを操縱する勇敢なる人とを得れば交通の容易な、發展的なるものである。

以上の如く海洋には遮斷性と發展性といふ全く相反する性質があるが、それらはいづれも一つものの二つの面に過ぎない。消極的なる民族はそのうちの海洋の遮斷面のみをながめ、發展的民族にあつては主としてその發展面を見る。而して發展面を見る民族にあつては、そこに必然的に海上交通機關、航海術等の發達を促し、又發達せる交通機關、發達せる航海術は一層その民族を發展的ならしめる。

我が國民の如きは嘗てはこの海洋を最も發展的に考へてゐた民族であらう。上代に於ける黒潮文化圏のことは暫くおくとしても、中世より近世にかけて我が國民は海上を我が家として海洋に非常なる發展を遂げ、航海術、船舶等も之に伴ひ高度に發達した。所謂「八幡船隊」が之である。彼等は南支那海の山なす波濤を突破し、堅牢なる支那沿海の城塞を撃破して深く長江を遡り、さらに北は沿海州、朝鮮、南は廣東、廣西、海南島、印度支那、マレー半島にまで到り、廣範圍に亘る制海權を掌握して强力なる歐洲のアジア侵略に對し堂々たる反撃を加へ、容易に南洋、支那侵略を可能ならしめなかつたのである。更に『國史眼』の江戸時代初期の我が國外國交通を叙する條には

「是ノ時マデハ我船舶の製頗ル堅牢ナリ、三桅ヲ設ケ漆髹ヲ施シ、人ヲ載スル數百人、操舟ノ術ニ練熟シ、亞米利加（新西班牙）ニ航スルニ至ル。時人之ヲ御朱印船ト稱ス」

とあり、支那南洋方面のみならず、勇敢なる邦人は當時太平洋をも來往してゐたことが窺はれるのである。現在それ等の航海記錄の保存せられてゐるものなく、世界探檢史上太平洋航路も

亦空しく西洋人にその名をなさしめてゐるが、當時白人等の航行した太平洋は概ね熱帶以南に過ぎず、實に第十六、七世紀に於て今日の北太平洋航路を開いたのは全く我が日本人であつたのである。

（石橋五郎博士「太平洋の地理的意義」地理教育第三十二卷第五號昭和十五年八月）

以上の如く我が國民は近世初頭までは海洋を極めて發展的に見て、旺んに發展したのであつた。それが鎖國によつて海から遮斷せられる樣になつて以來、海を遮斷的に觀ずるに至り、爾來四面環海のうちに生活しながら、全く陸に執着する國民となつてしまつた。開國後に於ても三百年の鎖國的考へからは容易に脫却し切れず、所謂「島國根性」の發展的氣魄に乏しきもの多きは誠に遺憾とすべきである。而も我が國に鎖國を採らしめ、我が國民に退嬰的氣持を與へたのは實にイギリスであつたことを思ふ時、イギリスの我が國に對する攻勢の遠く且つ深きに驚かずには居られない。

扨、かゝる海洋の二面的性格と同樣なる關係が、土地の拘束性の場合に就いても考へられる

のである。

前記の如く、ドイツが容易にその國土の統一を實現し得なかつたのには、その根底に複雜なる自然環境があつたことは疑ひない。併し國土の統一を妨ぐると考へられてゐるこの土地の拘束性も、之を見る立場を轉換するに於ては、恰も海洋の遮斷性が發展性となるが如く、反つて強力なる統一への原動力たり得るものである。卽ち區劃せられた各部分より萬事を見んとしてゐる間はその埒外に出ることは困難であるが、逆に全體的立場より各部分を見るならば、各部分は反つて全體に於ける部分として、全面的に活動することによつて、夫々の個性を全體のうちに活かすことが出來る。而してその際各部分の特殊性が全面的に活動することによつて、全體が全體としての機能を最もよく發揮し得るのである。云ひ換へれば全體的立場に於ては各部分が特殊的であればある程、それは一層全體に結びつくこととなる。卽ちここに土地の各部分に對する制約性、分散性は、全體に對する結合性、發展性へと轉換するのである。

ナチスの全體主義は實にこの「全體」に先づ着眼したものに外ならない。「個人の運命が全

體の運命を作るのでなく、全體の運命が總ての個人の運命を決定し構成するものである」とナチスは主張した。（一九三〇年八月ケルンにて行ひしヒットラーの講演）その際ナチスはこの全體を抽象的、普遍的に考へたのではなくして、具體的なるドイツ民族乃至ドイツ國家に求めた。而もナチスにあつてはその民族と國家とは不可分のものであり、民族主義に基く國家論が主張せられた。即ち彼等によれば文化を形成する力は本質上民族自體の中にあるのであつて、國家はこの民族の保存並に向上をその最高の任務とすべきである。而して民族の混合はその民族を墮落せしむるが故に、一民族を以て一國家を形成すべきであると云ふにある。そして彼等は民族及び種族とは無關係に構成されてゐる國家を形式的なメカニズムとして非難し、又各民族間の價値の差等を主張して「總てのものに優越せるドイツ」（Deutschland über Alles）の確信に基き、ドイツ人からのみ成る大ドイツ國の結成を主張したのである。

要するに世界に冠たるドイツ民族と、そのドイツ民族の祖國であり、故鄉であるドイツ國という信念より出發したのがナチスである。かゝる考へは先づ個人を前提として國家を考へた從

三、ナチスによるドイツ國土の統一

來の自由主義的、個人主義的立場とは全く對蹠的なものであり、個人よりも國家民族を重んじて先づ國家、民族を考へ、ドイツ國民に對してはこの國家民族に對する絶對の義務と服從とを要求したのである。

「各人の活動は全體の利益に反するを許されず」とはナチス綱領第十條に規定してゐるところである。而してこの國民の義務と服從とは、歸するところドイツ國民の一人一人を眞に活かす所以である事を知つたのである。

ヒットラーにナチズムとナチズム運動の萌芽とを與へたフェーダーは『ナチス綱領とその世界觀的根本思想』に於て全體主義を次の如くに說明してゐる。

「我々ナチストは、それ故に、率直に簡單に誰にも理解し得らるゝ言葉で『私益よりも公益を』と主張する。全體の爲に、國民全體の組織內に勤務する一員として、各人がより高き生活に目醒めた時、その時初めて各人は—各自その持場に於て—眞にその國民のより高き全體の中に組織され、その時初めて眞の社會主義＝共同精神が、即ち眞の生活が理解され獲得される。こ

の根本觀念の支配の下に於て始めて今日の掠奪經濟の中から全體の利益の爲に、從つてまた各個人の利益の爲に充分組織立てられた有機的な國民經濟が生れ得るのだといふことを認識するであらう」

フェーダーの以上の主張は經濟面を主として述べたものであるが、政治、文化等に於ても同樣なことが云はれるわけである。かくてナチスは全體卽ち民族國家に對する個人の服從を要求したが、一方それ等を運用するには上からの强力なる統一力指導力を必要とする。それがナチスの謂ふ『指導者原理』である。ナチスによれば國家の生活は絶えざる戰であり、市民は政治的兵士であり指揮官の手に於ける道具に過ぎない。一般の民主的國家では政治的機關はおよその下にある人民に對して責任を持つのであるが、ナチスでは軍隊に於けるが如く、すべての市民はその上の者に、而して結局は最高指揮官に對して責任を持ち、下の者に對しては命令權を行使するのである。

ヒットラーは『我が鬪爭』に於て指導者原理につき次の如くに述べてゐる。

三、ナチスによるドイツ國土の統一

「最善の國家組織及び國家形態は最も自然的に國民共同體の最も優秀なる人物に指導的地位を與へ、且つこれを尊重するが如き國家である」「そこには最早や多數決は存しない。只全責任を負へる少數の優秀なる人物があるのみである。Rat（相談）（會議）といふ言葉は再び本來の意味に歸る事となる。若干の人物が側に相談役としてゐるが、最後の決定は唯一人の人物が之を行ふのである」「嘗てプロシヤ軍隊をしてドイツ國民の驚異的武器たらしめた所の原則、卽ち各〻の指導者は下に向つて權威を持ち、上に向つて責任を負ふといふ原則こそは、將來移して以て我國の憲法の全構成の根本原則たらしめねばならぬ」と。

政治は下からの力によつてではなく、上からの力によつて動かされるといふところに「指導者原理」の根本性格がある。かゝる原理の上に立つてナチスは着々と國家組織の根本的建直しを實踐して行つた。ヒットラーが宰相に就任後僅に二ケ月の一九三三年三月三十一日には「國による各邦の劃一支配に關する暫定的法律」（Vorläufiges Gesetz für Gleichschaltung der Länder mit dem Reich）を定めて各邦議會は議員の過半數をナチス議員を以て構成する

やう改組し、更に同年四月七日には「國による各邦の劃一支配に關する第二法律」(Zweites Gesetz für Gleichschaltung der Länder mit dem Reich) を發して各邦に中央政府の權限を代理行使する聯邦統官 (Reichsstatthalter) を任命して施政全般の監視をなさしめ、以て中央の政策を強く各邦に反映せしめた。

越えて一九三四年一月三十日、即ちナチス政府成立第一週年記念日には國會に於て「ドイツ國新構成に關する法律」(Gesetz über den Neubau des Reichs) を可決し、即日ドイツ國參議院の同意を得て公布した。この法律はその名の示す如くドイツ國の基礎組織の徹底的變革を意味し、各邦は擧げて中央政府へその自主高權を移してこれに從屬し(同法第二條)、聯邦統官はそのまゝに內務大臣の職務上の監督下に邦長官の地位を與へられ(同法第三條)、而して邦議會は廢止されるに至つた(同法第一條)のである。爾來ドイツ國はドイツ多年の癌であつた聯邦制國家の形態を脫して多年の夢は實現され、名實ともに中央集權的國家の性質を帶びるに至つた。ドイツ史上まさに空前のことである。その結果從來中央政府に於て立法及び行政に

三、ナチスによるドイツ國土の統一

闘して各邦の利益を代表してゐたドイツ國參議院は廢止され、「各邦の國籍は廢棄せらる、ドイツ國民は唯一のドイツ國籍を有す、ドイツ國籍は內務大臣の認可によつてのみ授與せらる」ることとなり（二月五日命令）、司法裁判に就ても「すべての裁判所はドイツ國民の名に於いて判決し、司法大臣は司法權の中央政府への移讓に必要なる規定を設くる事を得」（二月十六日法律）ることゝなり、中央に統制せられるに至つた。かゝる政治的統一と共に、經濟的にも、文化的にも、また軍事的にも、同時に中央集權的態勢が樹立せられて行つたことは申す迄もない。

かくてこゝに强固なる中央集權的ドイツ國が建設せられることゝなつた。之により從來分散してゐた各邦の特色は反つて活かされ、各邦に於て今迄に蓄積され來つたエネルギーは統合せられ、全體としての一大エネルギーを構成するに至つた。このことは更に一層各邦を中央に結びつける結果となつたのであつた。

かゝる成功を收め得たのは、ドイツ國民の全體主義に對する理解の徹底と、また實に「指導者原理」に基く確信に滿ちた政治の運用にあつたといふことが出來よう。而もかゝる指導者原

理に基く政治を、躊躇逡巡するところなく國民に强行し得たのは、一に世界觀の轉換ありしが故であつて、在來の個人の立場より全體を見んとする自由主義的個人主義の立場に於ては、到底爲し得なかつたところであると共に、また思ひも及ばなかつたところである。

之を要するに、ドイツの自然的拘束性が、曾てはその聯邦的性格をつくる要因であつた。しかるに世界觀の轉換は、この自然的拘束性を克服して、却つて統一に於ける個の全き活動に轉じ、更に力强き結合を完成するのである。しかして斯かる世界觀の轉換は、更にその指導者原理は、ドイツの地政學的環境と、更にはナチスによる不斷の闘爭の結果として齎らされたものなのである。

三、ナチスによるドイツ國土の統一

四、生活地域の要求

十世紀以上も、求めても得られなかつたドイツ民族の組織的統一國家、即ちナチスが一九二〇年來の願望であつた「第三帝國」の理想は、遂に實現を見ることゝなつた。こゝにドイツ民族のこれ亦宿願たる生活地域に對する要求が眞劍に考慮せられる段階となつて來たのである。

之より先きドイツは、敗戰の結果その領土を多く喪失した上に、ヴェルサイユ體制の鐵鎖によつて十重二十重に縛り上げられ身動きも出來ぬ狀態に置かれてゐた。即ち大戰の直接の結果として一八〇萬人の壯丁を失つたドイツは、更にヴェルサイユ條約によつて、民族自決主義の名の下に、エルザス・ロートリンゲン、オイペン、マルメデイ、シュレスウィッヒ、東プロイセン（一部）、西プロイセン（一部）、ポーゼン、上シレジエン（一部）、ダンチッヒ等、多く

の領土を奪はれた。その面積はドイツのヨーロッパ本土に於ける領土の一三%、人口は一〇%に相當し、その中にはドイツ農民が長年月に亘り血と汗とによつて開墾した耕地の一四%、並びに近代工業發達に不可缺の重要資源たる鐵・石炭の産地が多く含まれてゐた。炭坑は從來ドイツの所有してゐた一九%(ザールを合すれば二六%)、鐵山はその七五%に當つてゐた。而も民族自決主義はドイツ側に對してはその適用を拒否せられ、獨墺の併合は認められず、反つて分割せられた領土の中には、多くのドイツ民族が、逆に少數民族として殘留する結果となつたのである。

ドイツは以上の如く本國四周の要地並びにその民族を分割せしめられたのみに止らず、更にアメリカ、アジア、大洋洲に亘つて所有してゐた海外植民地に關する一切の權利をも亦抛棄すべく强要せられたのであつた。その上身を守るに足るべき武裝すらも許されず、又所謂天文學的數字と云はれる莫大なる賠償金を課せられたことは人のよく知るところであらう。

たゞでさへその自然が惠まれてはゐなかつたのに加へて、かゝる狀態の下に於て、ドイツが

その國民のすべてを養ふことは、殆んど不可能なことであつた。而も次第に深刻となり來つた大戰後の世界不況は、勢ひ從來國際通商上重要なる地位を占めてゐた諸國をして、相率ゐて自國產業乃至貿易に對して漸次保護政策を强化する方向に向はしめ、法外な關稅や割當制度を課し、爲替の制限や淸算協定等を採らしむるに至つた。このことは多くの領土を失ひ、その活動の地盤を喪失したドイツに對して一層甚大なる打擊を與ふることとなつたのである。

かくしてドイツ民族の生存維持の爲に必要なる生活地域を獲得せんとする要求は、第一次歐洲大戰後一層切實なる問題となつてゐた。新ドイツ民族の聖典と稱せられてゐるハンス・グリムの『土地なき民』は、恰もドイツがかの惡性インフレーションの混亂を漸くにして切拔け再びその周圍を見廻す餘裕を生じた一九二六年の作品で、土地なき民としてのドイツ民族の、肺腑より迸り出た叫びを代表するものに外ならない。その冒頭に次の如く書かれてゐる。

「さて、この小說に描き出される人生の蔭には、往々世の中に見うけられるごとく、一介の人間の辿つた道程が民族の運命をくりひろげてゆくやうに、われわれ獨逸民族の共通の運命が

赤裸々の相貌をあらはしてをり、從つてわれわれのかぎりない大きな問題をここに大観することとなるのだ。これこそ、この書物の生れいづる前に、もろもろの鐘が鳴り響かねばならない所以である。それとも讀者は、われわれ獨逸民族のせつぱつまつた運命の問題よりも、もつと重大なことがこの天地の間に存在すると考へるであらうか。

さだめし讀者は首をかしげて言ふであらう。獨逸民族はいかなることがあつても、運命の問題に立ちむかひながら生きつゞけてゆくであらうと。しかし友よ、生きるとは何を意味するのであらう。病みさらぼへる人も生き、盗人も生き、遊女も生き、たがひに食ひさいなむ虫けらのたぐひといへども亦生きてゆくではないか。しかし獨逸の民がすぐれて美しくなるためには、わが身の周圍に土地を必要とし、わが身の上に太陽を必要とし、わが身の中に自由を必要とするのだ。獨逸の民は、やがて二千年になんなんとする歳月の間を、むなしくあだな望みをいだきつゞけて來たのであらうか。讀者よ、もしたまたま君自身が身心共に高貴な人となり、君の子供等が病弱な癈疾者や、人目を忍ぶ盗人や、あはれな娼婦の運命からまぬがれたとして

も、それは君の功績といへるであらうか。

君は君の周圍を見、君の前面を見、廣く子孫を考へ、新しく生れいづるものの命を考へねばならない。われらの前には、土地狹き苦悶の鎖が立ち塞つてゐるではないか。この狹隘な土地からは、もはや肉體もたましひもすくすくとのびいづる土地がないのだ。しかし友よ、私は知つてゐる。私の子供達も、私の一族も、亦獨逸民族も、畢竟するにみな同じ一つのものであつて、たゞ一つの運命をになつて行かねばならないといふことを」と。（星野愼一氏譯『土地なき民』）

このドイツ民族の要望を擔つて颯爽と政治舞臺に登場して來たのがナチスである。ナチスは既に一九二〇年二月に決定された綱領第三條に於て「我々はドイツ國民の生計と過剩人口の移植の爲めの地方及び土地（植民地）を要求す」との目標を明瞭に示して居り、又ヒットラーも『我が鬪爭』の中に於て「土地を擴大しない爲に大國民が沒落の止むを得ざる狀態にある場合には土地や領土を求める權利は義務にまでなる。黑人とは違ひ、人類文化に偉大な貢獻をした

我々ドイツ民族は倫更である。ドイツは世界の强國にならねばならぬ。さもなくば寧ろ存在せぬ方がましである」と叫んでゐたのであつた。

今や政權を獲得し國內の統一を實現するに及んだナチスは漸次この綱領の具體化に向つて邁進することとなつた。しからば一體ドイツはこの土地を何處に求めんとしてゐたのであらうか。その民族主義の立場から云うても、亦ナチス綱領第一條に「我々はあらゆるドイツ人を民族自決權の基礎の上に大ドイツへ結合する事を要求す」と明示せられてゐるところより見るも、少くも先づヨーロッパに於ける舊獨領の失地回復を目指してゐたことが諒解出來ると共に、更に進んでは嘗ての第一帝國たる神聖ローマ帝國の再建をも意圖してゐたことが推察せられるのである。之と共にまたナチスとしては、舊ドイツ領植民地の回復をも目指してゐたことは屢次の聲明によつても明らかである。ヒットラーはまた次の如くに述べてゐる。「われ／＼は今後ともますます國內生產の增進に努力せねばならぬが、これをもつてしても土地の不足を如何ともなし難い狀態にある。われ／＼は年々聲を大にして舊ドイツ植民地の返還を要求するであ

らう。これら植民地はかつてドイツが何國からも奪取したものではなく、現在の所有者にとつては殆ど無價値に等しいものであるが、ドイツにとつては死活的必要のあるものなのである。予はドイツの植民地要求が、ドイツに對するクレヂットの供與によつて埋め合はさるべきものでないことをこゝに公然言明する。われ〳〵はクレヂットを要求するものではなく生活の前提條件を要求するものである。」と。（一九三八年二月二十日の國會に於ける演說）

併しナチスの發展要求は、歐洲に於ける失地や海外に於ける舊植民地を回復することのみを以て滿足とする事は出來なかつた。第一次歐洲大戰後戰捷國たる英佛米は、民族自決主義の美名のもとに歐洲を多數の小國家に分割し、之を政治的に經濟的に自己の配下に置き、ドイツ包圍の態勢を形成してゐたのであつた。從つてドイツが眞の自主的國家となるが爲には、このヴェルサイユ體制の桎梏を根底より覆すことが必要であつた。而してヴェルサイユ體制の打倒は直ちにイギリスの世界支配そのものに對する挑戰にまで發展せざるを得ない。茲にナチスの大ドイツ國再建の考へは、必然的に歐洲全體の新秩序建設といふところにまで到達せねば止まなかつた。

この事はナチスがその後進んで行つた實際を見るならば直ちに諒解せられるところである。

一九三三年十月國際聯盟を脱退したのを皮切りとして、ザール地方の復歸（三五年三月一日）、ラインランド再武裝（三六年三月七日）、獨墺合邦（三八年三月十三日）、ズデーテン地方獲得（三八年九月三十日）と發展して行つたところ迄は、確かにナチスが最初から標榜してゐた「一民族、一國家、一總統」の目標に向つて進んで行つたものといふ事が出來るであらう。併し一九三九年三月十五日、チエッコのベーメン、メーレン二州を保護領に編入し、チエッコ・スロヴァキアを解體に導いて以來は、ドイツはスラヴ族たるチエッコ民族をも包含することゝなり、この原則は一應發展的に解消し、爾來ナチスは全面的に歐洲の新秩序建設を目指して邁進しつゝある狀況である。

併し乍ら之を以てナチスはその民族主義を拋棄したものと見做すことは出來ない。一體ナチスの主張する全體主義はその基礎を民族主義に置いてゐる。而してその民族主義の基礎はまたドイツ民族の優秀性に對する絕對的なる信仰にある。卽ちナチスの全體主義は、ドイツ民族の

ドイツ民族に對する信仰より出でてゐるところに、はじめてその生命を見出すことが出來るのである。ドイツの本質を最も深く體驗し、革命の勃發、戰敗による疲弊混亂により、あらゆる方面に於てあまりにも本來のドイツ的なるものを失つた祖國ドイツをして、その失ひたる魂を再び喚び起さしめんとするのが實にナチスの運動であつた。從つてナチスの一擧手一投足は、これすべて民族主義より發してゐるものと謂ふべきである。これが爲にはドイツ國內のあらゆる方面に亘る非ドイツ的なるものの克服を必要とした。こゝにナチスは「戰ひ」の意義を明確に認識し、國內の敵に向つて戰ひを挑んで行つた。ヒットラーの「我が鬪爭」の根本精神も亦此處にあつた。この國內に對する戰は必然に、歐洲否全世界に亘つてはりめぐらされてゐた英國的、非ドイツ的なるものに對する戰ひとならねばならない。ドイツ民族主義はその戰ひの過程に於てドイツ民族を中心とする歐洲新秩序の建設といふ概念にまで發展して行つたのである。

かくて今やナチスはドイツ中心の歐洲廣地域圏の建設を目指してゐる。この事によつて從來divide and rule の原則に基いて歐洲を政治的、經濟的に支配し來つた英國的體制を全面的に

打倒することが出來ると共に、又この事によつて、はじめて、從來英國的世界の繁榮の爲にのみ奉仕せしめられて來た歐洲をして、世界に冠たるドイツ民族指導の許に、歪曲を正し、眞にその本然の姿に立ち返らしむることが出來ることをナチスは信じて疑はない。

現在ドイツ地政學者達の稱へてゐる「生活地域」(Lebensraum)なる概念も、單にドイツ民族の生存上必要なる地域といふのみでなく、他の民族をも含め、そこに新らしき秩序の建設の意味が含まれてゐることに注意せねばならない。ドイツ地政學者の「生活地域」についての言を聽くならば次の如くである。

「生活地域といふのは、第一には生物學的概念であり、第二には地理學的概念である。生物學的な概念は、政治的發展を人種並びに民族體の生活過程として評價することより、必然的に生ずるところのものであり、これこそ民族社會主義の立場より歸結されるものに外ならない。かゝる生活過程の行はれる場所が當然地域(ラウム)と云はれるものであり、地政學も亦かゝる地域(ラウム)を對象とし、この土地を有機的單一體として見る。この土地が地政學から云へば、人間及び人間以

外のあらゆるものの生活を支へてゐる地盤である。

民族體自體に於いて行はれる生活過程と、この民族體の生活地盤たるラウムに於いて、同時になされてゐる人間及び人間以外のあらゆるものの生活過程とは、相互に不可分の關係にある。而もこの二つの生活過程は、相互に補足されつゝより高き統一へと向ふものであり、それはこの兩者が相互に對立抗争を續けてゐる場合に於ても同様な結果となる。

この兩者の生活形態が一體となつて進み行く時間的な經過こそが、まさに地政學的な意味に於ける歴史の概念を構成するものに外ならない。人間とラウムが如何に交渉し、人種・民族及び國家が、一定のラウムに於て英雄の指導下に如何に形成せられて行くかを取扱ふのが、地政學のテーマである。

生活地域の政治的現象が最も明瞭に現はれてゐるのは、農民社會の場合である。農民社會にあつては地に深く根を下して居り、人間とラウムとの間に、相互に直接的に結びついた生活をしてゐることが殊に著しい特色をなしてゐる。農民は實に生活地域の肢體とも云ふべきもので

ある。農民は人間と空間との鬪爭に於ける前衞戰士である。彼こそは土地を亂暴に取扱はず、恰も人間に對するが如く之をいたはりつゝ造り代へて行くあの人間的な力の所有者である。さればこそ農民は、その種族の映象を最も明瞭に土地に刻みつける。ドイツとポーランドとの言語境界の兩側、チップス（註、カルパチア山脈の Tatra 高原地方に住むドイツ語を話す人々の殘されてゐる地域）、ジーベンビュルゲン、更にはペンシルバニア等に於けるドイツ農民の宅地等を見たことのある人ならば、著者の意味するところを理解するであらう。

生活地域といふ概念の第二に意味するところは、經濟地域である。民族及び國家が、存立すべきものとすれば、種族とラウムは不斷の生活共同體を形成せねばならないとする認識より、必然的に導き出される要求は、生活力ある國家は、自己の土地によつて養はれねばならぬといふことである。若しもドイツに於けるが如く、それが全く不可能ならば―地政學の論理、及び民族社會主義的經濟政策の實踐に鑑み―解決の途は唯一つしかない。卽ち若干の民族がその經濟的要求を相互に滿たし合ふことによつて、共同生活を營むことである。かゝる共同生活は、

株式市場によつて左右されて、或場合には結び、或場合には疎遠となる樣な偶然的な法則の下に立つものではない。この場合外部からの影響を出來るだけ遮斷せねばならぬ。生物學の示すところによれば、相互に調整し合つてゐるかくの如き共同生活は、個々の肢體の獨立性を確保しながら、構成されてゐる全體の力を强化するものである。こゝにドイツ經濟生活の核心が存する。更に云へば、自己の土地と最も緊密に結びつき、自給自足に向つて努力することによつて、完全に、しかも一層健全にその土地の價値を發揮せしむることが之である。併し乍ら一方に於て土地が不充分であるならば、妨害せられざる眞實の共同生活を作らんとする意志を以て、近隣の民族と經濟的に相補足し合ふことが肝要である。

第三には、文化が擴まることにより生活地域が政治的に有効に形成されるのである。文化の光は、農民居住地、及び經濟地域の中心地帶をこえて、土地に制約せられること極めて少なく、流れるが如く、又飛躍的に波及して行くのである。その例として、こゝに東方に向つてのドイツ都市權の擴大、ハンザ同盟の經濟活動、及び第二帝國の植民活動を擧げよう。地政學的概念た

る生活地域は、かくして三重の段階がある。ドイツの生活地域は、第一にドイツ農民がドイツ民族體と直接に結びついて生活し、ドイツ的意味に於ける景觀を形成して行つた場所であり、第二には他國の經濟がドイツの中心地域と結びつくことにより補足せられて、調和せられ、秩序付けられた共同生活形態に於て、互ひに力を高め行くところの場所である。第三には、ドイツ文化が他の文化と補足し合ひ、交換しあつてゐる地域である。

斯樣に見れば「生活地域」なる概念は、含蓄的な意味を有し、有機體的なものであり、決して「帝國主義的」なものではないことは明らかである。それは國家的生活の相互の調整を行ふものであり、强國が他國の生活を抑壓するが如きものではない。それは無理のない自然的な觀點のもとに秩序を與へるものである。この自然的な觀點こそが生活地域概念の强みであり、又「勢力範圍」(Interessensphäre) といふが如き概念を打破する力を與へるものである。我々の云ふ生活地域の概念と對蹠的なるこの勢力範圍といふ西歐的概念は、―トルコ、イラン(或は中央アメリカに現在その傾向が見出されるのであるが―持てる國々の政治的機械主義的考へ方よ

り生れた古典的な産物であり、歴然と掠奪的臭味を有してゐる。ヴェルサイユ體制の中に、かかる西歐的考へ方に對する警告的な表徴が示されてゐる。」と。

(Kurt Vowinckel: „Zum Begriff Lebensraum„ ハウスホーフェル七十歳誕生記念論文集)

以上の論説に於て、ナチスの云ふ「生活地域」なる概念が、從來の帝國主義的概念と全然相違してゐることを强調してゐる點には特に注目せねばならぬ。

ドイツはナチス以前に於ても、旣にウィルヘルム二世の時代、旺んに海外植民地の獲得を行つた。長く國土の統一が招來せられず、必要なる土地を獲得せんとする切實なる希望も容易に到達することの出來なかつたドイツも、第十九世紀後半、プロイセンを中心とする統一的國家の成立によつて、漸くその希望が充されることゝなつた。併し乍ら、この際に於ける發展には、確かに帝國主義的色彩の極めて强烈なるものがあつたことは、爭はれぬ事實である。寧ろ英國と相並んで當時のドイツは、帝國主義國家の双璧とも稱すべきものであつた。

資本主義の高度に發達してゐた當時のドイツとして、劃一的大量生産による商品が自由主義

的販賣によつては最早處分し切れなくなり、新たなる外國市場の擴張と獨占とが必要となり、而もかゝる大量生産より必然的に生ずる原料及び燃料に對する需要の增大は、それらの資源の經濟的、政治的獨占を絶對的に必要とするに至つた。それと共に、高度の銀行資本集積の結果として、特別利潤の獲得及び資本輸出に結合せる商品輸出のために、資本の輸出も亦特別に重大なる意義を有するに至つたのである。こゝにドイツは必然的にその商品の市場として、その必要なる資源の供給地として、而してまたその資本の輸出地として、植民地の獲得を要求するに至つた。然るにドイツがその統一を達成し愈々この目的に向つて世界に雄飛せんとした際には、既に英・佛・露、就中イギリスによる帝國主義的植民地獲得が一應終了してゐた。從つてドイツとして之に對抗して新たなる植民地を獲得するには、勢ひ帝國主義的進出を計らねばならなかつた。これと共に、當時ビスマルクや、更にはその後のウィルヘルム二世の周圍には多數のユダヤ人があり、當時のドイツの政策は彼等によつて左右され、從つてその發展が帝國主義的形態をとるに至つた點も看過し得ない。有名なる電氣事業會社たる「アー・エー・ゲー」

の設立者エミール・ラーテナウ、或は造船界屈指の大會社たるハンブルグ・アメリカ會社の支配人アルベルト・バリンの如きユダヤ人は、當時のドイツ財界を代表する大立物であり、殊にバリンの如きは、ウィルヘルム二世より特別の寵を得てゐたのであつた。

以上の如き事情のもとに、ウィルヘルム二世時代のドイツは、帝國主義的手段によつて、アジアに、アフリカに、近東に、また南洋に、その觸手を伸ばして行つた。一八九〇年から一九一四年にかけ、アフリカに於けるドイツ保護領は增加し、ドイツ國旗は數百の南洋諸島の潮風にはためき、支那沿岸には膠州灣が租借され、ドイツ帝國主義はバグダード鐵道によつてトルコに侵入し、その極、列強の利害並びに政策と衝突し、こゝに第一次歐洲大戰の狼烟は擧がつたのであつた。

かゝる帝國主義的發展時代にあつては、强大なる帝國主義國家は、弱小國を自然の秩序、歷史的因緣を無視して、彼等の利己的なる立場より分割し、之に對し主として金融支配に基く極端なる抑壓と搾取とを加へ來つた。一方彼等自らは民族的、地理的地盤より遊離して、所謂「世

界的市民」となつて行つたのである。之に對しナチスの新らしき「生活地域」の概念は、その地域を「血と土」とに結ばれた有機體、生命體と考へるものである。ナチスに於ては民族は一定の土地に根ざすものであり、又民族は過去現在未來を貫いて永遠に流れて行く血の連りである。而して土地はその民族が運命的に定着する神聖なる生命的地盤である。か〻る民族が、夫々の土地に於て、眞にその所を得て安住し、それを通じて自由と統一とが調和する生活共同體を形成せんとするものが、ナチスの生活地域に外ならない。これは一方から見れば、從來本來の地域的並びに民族的地盤から遊離し、放浪し、隙あらば他國を侵略搾取せんとしてゐた白人種各國家の混沌無統制狀態を終止せしめ、彼等をして「血と土」の生命原理に從つて安定せしめんとするものであり、これこそ歐洲の新「秩序」を目指すものである。

猶、か〻る生活共同體に於ては、家族に家長がある如く、そこには「指導民族」が存在する。而してその指導民族は、その生活共同體を正しき立場に於て導き、その共同體に於けるすべての民族と國家をしてその處を得しむべき重大責務がある。ナチスの云ふライヒ (Das Reich) は

かゝる意味を有する。このライヒが共同體の道義的中核をなし、その政治理念をその裡に光被せしめるものである。さればライヒは無私なる崇高なる世界観の把持者たることを絶對の條件とする。「總てのものに優越せるドイツ」(Deutschland über alles) の確信に基くナチス・ドイツが、その指導者としての責務を果さんとしてゐることは申す迄もない。

ナチスの云ふ以上の如き「生活地域」を經濟面より見たものが「歐洲經濟共同體」の考へである。ハインリッヒ・フンケは「歐洲經濟共同體」について次の如く述べてゐる。

「今日、新しき歐洲經濟共同體は、古き原則に從つて成立する可能性がある。まこと既に今日、歐洲の諸民族は獨逸經濟振興の結果として、一個の大いなる勞働共同體に結集してゐる。此の經濟共同體の效果は次の如くである。

一、經濟活動を行ひつゝある人々の頭上に、永遠のダーモクレスの劍の如く振りかゝつてゐる危險なる市場獨裁に代り、民族の生產力の開拓といふことが現はれるであらう。(中略)

二、經濟的協働の目標は、生活地域共同體である。卽ち單一栽培を破壞して、不可能なる島國

的孤立性をもつて置き代へることが、此の經濟政策の任務なのではない。

獨逸國が大規模のアウタルキー化を通じて經濟の重點を再び自己の國土の中に移した其の時に、獨逸は、歐洲經濟の自己生成にとつても亦政治的前提となつた。併し決して島國的孤立性を追求したわけではなく、歐洲に於て可能性ある總ての連繫を支持したのである。まさに斯くして歐洲の小國群は、彼等が常にその隣接國を頼りとして居り、從つて歐洲がこれら小國群を考慮せねばならぬと同じやうに、彼等相互に亦頼り合つてゐることを明らかに知るべきなのである。

自由主義的活動法則に對抗する未來の歐洲經濟交易の大いなる區別は、此等の諸國が安定せる良き顧客を持ち、此の結合を通じて、獨自の力では到達し得ぬ段階に生育することである。

三、經濟政策の目標は、東歐及東南歐へのより強烈なる注目を結果するであらう。アングロサクソンの經濟觀は、世界中到る處に於て、特に收益の上りさうな經濟的機會のみを極力利用

することに向けられたのであつた。言はゞ菓子から乾葡萄だけを摘みとり、菓子そのものは利用せずに放置したわけである。東歐及東南歐を特に放棄して置いたのも斯かる見解に基いてゐる。此の狀態に對して、獨逸の新經濟政策は、旣に過去七年間爲し來つた如く、終末を與へるであらう。

四、所で、發展の極地とは完全就業の實現である。獨逸民族は新しき經濟認識に基いて人類の災厄を排除し、多くの他の諸民族に對しても、亦直接の結果として、よりよき就業のための手段を與へたのである。併し更にそれ以上に、大陸の廣大なる部分の開拓によつて條件付けられたる歐洲の偉大なる任務の遂行は、今日極少數の人々によつてしか正しく考へられてゐない程大規模に、諸力を動員するであらうことは、疑を容れぬ。

斯くして古き歐洲大陸は新紀元を開始する。民族と國土とは最早單なる道具ではなくなり、それは擔當者であり、國家生活の構成者となるのである。」と。

(Heinrich Hunke: Volk und Raum in der wirtschaftspolitischen Neuordnung Euro-

pas. "Geopolitik," Dezember 1940.)

以上の如く新らしきヨーロッパ經濟共同體に於ては、從來の搾取的市場獨裁に代るに、各民族の生產力の開拓を目指してゐる。この事は各地域各民族の夫々の特性を全面的に活用せんとするものであり、まさしく我等の目指す新秩序建設の意義に極めて近きものあるを知らねばならない。

之を要するに「土地なき民」としてのドイツ民族の土地に對する要求は、最初は生活權の主張、卽ちドイツ民族生存維持のため必要なる地域といふ考へより出發したものであつたが、やがて他の諸民族をも含めたる民族共同體としての生活地域なる概念に高められ、現在に於ては更に歐洲新秩序といふところにまで到達するに至つた。「生活地域」(Lebensraum) なる言葉も、最初の間は第一の場合を主として指してゐた。それがやがて第二の段階として「廣地域」(Grossraum) なる言葉を生じ、更に今日に於ては「生活地域」も「廣地域」も同樣なる意味に於て用ひられ、他の諸民族をも含め、之が一の生命體として相互充足し、有機體として生命

的活動をなすべき地域なる理念に向ひつゝある。この點を重視し、今後は "Lebensraum," を「生命圈」と譯すを至當とすると考へる。

（註）Heinrich Rogge: „Lebensraum" und „Grossraum" als völkische Begriffe. „Geist der Zeit" Februar 1941.

—Man vergisst vielfach: daß aus dem deutschen Problem des „Volks ohne Raum" erst sich der deutsche Begriff des „Lebensraumes" entwickelte, und aus diesem der aktuelle Begriff des „Grossraumes", in dem mehrere Völker ihren Lebensraum haben.—

—Wir denken den deutschen Lebensraum als Mehrvölker-Lebensraum, als gemeinsamen Grossraum, als Objekt der Planung und Ordnung.—

なほ以上の如き「生活地域」なる概念は、その程度の差こそあれ、古來より他の國々に於ても存在してゐた點に注意せねばならぬ。實はこの「生活地域」を求めての努力が、有史以來の歷史の動因といふべきであらう。この概念に對し、新しき民族政策的內容を與へ、更にこれを

徹底的に目的意識的に構成したのがナチスの云ふ「生活地域」であつた。之と共にドイツに於ては、かゝる概念がドイツ現實の動きに即應して發展してゐる點に注意せねばならぬ。ナチスに於ては先づ最初から完備せる理論があり、それに基いて實踐があつたのではない。目標に向つて先づ實踐があり、それを跡づけたのが理論であり、而してその理論がまた實踐を指導して行く。そこにはじめて理論にも實踐にも、絶えざる生成發展が約束せられるのである。「生活地域」概念の發展はその好箇の實例といふべきであらう。

四、生活地域の要求

五、ナチスの地理建設

ゲルマン民族の生存上必要なる地域を要求する聲は、ナチスに於て歐洲の新秩序建設といふ概念にまで高められるに至つた。

この目的を貫徹せんには、屢説せし如く、國の內外に亘るあらゆる非ドイツ的なるものに對する戰ひが必要であつた。ナチスは政治も經濟も學問も思想も、すべて之れ「戰ひ」として觀じ、その總力を擧げて非ドイツ的なるものの克服に向つて實踐した。

こゝにナチスの總力戰を見ることが出來る。之に伴ひナチス・ドイツは必然的に戰爭形態をとるに至つた。「指導者原理」なる概念も、かゝる立場に於て生れ出たものに外ならない。

このナチス總力戰に基礎と方向とを與へるものに地理學がある。ナチスの鬪爭の開始せられ

た當時に於て、現實の世界の地理的景觀は、英米的秩序によつてまさに編成し盡されんとしてゐた。民族自決主義の美名の許に、多くの弱小國家を作り、之を彼等の金融の紐帶によつて結び合せることにより、世界金融獨裁の體制を確立し、之と關聯して世界の産業分布を偏倚的ならしむることにより、英米に依存せざれば自立し得ざるが如き體制をとらしめてゐた如きは、その顯著なるものと云ふことが出來る。新國境線を設定する如き場合にも常に英米の手がその背後にあつた。而かも世界の地理學界は、かゝる現實の景觀の不當歪曲を明らかにするところがなかつたのみか、寧ろこの景觀を最も合理的に說明することを以てその任務として來た。第一次歐洲大戰後の戰捷國側の政治地理的研究の如きは、その殆んどすべてがヴェルサイユ體制を意義付けんとしたものであつた。イサイヤ・ボーマンの「新世界」の如きも、この線に沿うた代表的著作と云ふことが出來るであらう。

ナチスがヴェルサイユ體制の桎梏を斷ち切り、祖國ドイツを再建せんには、地理に於けるかかる秩序を打倒することが肝要であつた。新らしきドイツ地理學界は、その世界觀に基く地理

觀照により、歪曲せられたる現實の景觀を照破し、從來の地理的詐略を看破し、地理的事象の正しき把握によつて、その總力戰の進路を誤らざらしめんとしたと同時に、その地理觀そのものが亦舊秩序的地理學に對する決定的な戰ひを挑むものであつた。カール・ハウスホーファーを中心とするドイツ地政學の運動は、かゝる舊套を打破すべく飜された鮮やかなる旗幟であつた。我等はナチス・ドイツの今日のかゞやかしき成功の蔭に、これ等地政學者達の懸命なる努力がひそんでゐることを銘記せねばならぬと共に、その努力の結實以前に於いて、この學派が受けた怒濤の如き非難と攻撃とを想起せねばならない。

以下ナチスの新らしき地理建設の有する意義について、聊か觸れて見ることゝする。

抽象より具體へ——地政學の問題

ナチスの世界觀が、ゲルマン民族に對する絶對的な信仰に發してゐることについては、屢説

した。この事は實に從來の抽象的な世界觀、哲學的思惟に對する根底的なる批判である。ゲルマン民族の優秀性については、如何なる科學的方法をもつてしても、他國の學者を納得せしめ得るが如き完全なる證明を與ふることは絕對に不可能である。それはあらゆる科學的究明に俟たねばならぬが、而も終局に於ては寧ろ、自己の信仰によつて把握せらるべきものである。卽ち彼等の世界觀の基礎は信仰にある。ドイツには „Deutschland über alles" といふ言葉がある。我が國に於ては之を「世界に冠たるドイツ」とか「總てのものに優越せるドイツ」とか譯されてゐる。本論に於ても一應これをそのまゝ用ひて來た。併し、その „über alles" といふ言葉は「他に比してドイツが優れてゐる」といふそれだけの意味ではない。他と比較してその優劣を云ふ時、それに止まる限りそれは既に冷やかに抽象化された、又客觀的な議論である。ドイツ人の氣持としては、他と比較の問題ではなく「我々は絕對的に優秀である」といふ信念であらう。他と比較しての問題ではなく、自己の信念として自己の優秀なることを確信してゐる氣持が、この „über alles" の表現してゐる意味と解すべきであらう。實にナチスは

この „über alles" に徹し、之を最も深く體驗したものであつた。

この信仰に基礎づけられてゐることにより、ナチスに於ては、近世以降の合理主義的な科學的精神が全面的に否定せられることゝなる、これは抽象より具體への轉換を意味してゐるものに外ならない。

元來ドイツ哲學は、論理の綿密さを以て世界に有名であつた。併し現在のドイツに於ては抽象的なる論理の遊戯は斥けられ、常に具體的なる現實の政治との密接なる關聯にその目標を置いてゐる。我々の思惟も、我々の行動も、我々の現實と矛盾したものではあり得ない。我々の思惟は形象的に現實的であり、形象なき觀念論の中に失はれることがあつてはならないといふのが、彼等の主張である。茲にナチスに於てはあらゆるものに對して政治性(ポリティーク)—ゲルマン民族の信仰にその基礎を有する—が要求せられる。從つてゲルマン民族の發展と無關係なる所謂學問の爲の學問、現實より遊離せる學術の研究は、ナチスに於ては許されない。かゝる考へは學問と實踐との一體性を說いてゐるものであつて、所謂純粹の學問(?)の應用としての實學と

いふが如き、學問と實踐の折衷的態度を更に止揚せるものといふことが出來るであらう。

地理學も亦當然實踐の學として考へられ、取扱はれた。こゝにナチスに於ける地政學（ゲオポリティーク）の發達を見る。地政學は後述する如くドイツに於てナチスに始まつたものではなくして、既に第一次歐洲大戰後間もなく勃興しつゝあつたものである。それがナチスによつて全面的に取上げられ、ヴェルサイユ體制の桎梏の打破に向つてドイツの政治を指導すると共に、國民をその方に教導し、結合せしめ、又外に向つてはドイツの行くべき途の正當なる所以を知らしむるところの、現實的、實踐的役割を果して來たのであつた。現在に於ても、ドイツに於ける地政學の第一人者たるカール・ハウスホーファーやバンゼの如きは、ヒットラーの背後にあつて、その政策に多大の貢獻をなしつゝあると云はれてゐる。ナチスの副總統ヘッスがハウスホーファーの助手であつたことは人のよく知るところである。

かくて現在に於ては、ナチス・ドイツの動向と地政學とは、離すべからざる關係にあるのであるが、前大戰の當時に於ては、學問と政治とは必ずしも一體的關係にはなかつた。寧ろ前大

戰敗因の有力なる一因は、當時のドイツ人殊にその外交の衝に當りしものが、世界の情勢を洞察するの暇なく、これが爲め大勢の判斷を誤つたところにあつたことを擧げることが出來る。而もかゝる結果となつたのは、當時のドイツ地理學が實踐性を喪失し、直接國策に貢獻するところ尠く、自らは所謂學問の爲の學問として抽象的、普遍的なるものゝ追究に專念するか、或は無立場の立場に於て、あるがまゝの世界を描かんとしてゐたところに原因してゐるところが尠くない。併し乍らドイツの地理學は、決して近代的學問としての基礎を確立せし當時から、現實と遊離してゐたものではなかつた。

現在多くの人々は、ラッツェルを見做して地理學に科學性を與へた人として、所謂學問的地理學の祖としてゐる。彼が近代地理學を確立したことは勿論申す迄もない。併し彼の研究が所謂學問の爲の學問として現實より遊離したものであつたと見ることは正しくない。彼は普佛戰爭後の獨逸帝國發展期に際會して居り、又自ら普佛戰爭に於ては志願兵として出征し、名譽の負傷まで被り、數多くの戰功をあらはして鐵十字章まで授與せられてゐる戰爭の體驗者である。

従つて彼の研究には實學的傾向が多分にあつたと見るべきである。こゝに彼の『政治地理學』(第一版一八九七年)や『海洋論』(一九〇〇年)が生れることが出來た。殊に『海洋論』に於てラッツェルが、「世界に重きをなさんとせば海洋と結ばざるべからず。地球支配の至寶はたゞ海よりのみ得らる」と喝破し、海上支配の地理學的根據を明らかにしたことは、時のカイザー・ウィルヘルム二世をして「吾人の將來は海上にあり」と叫ばしめ、ドイツの海軍大擴張時代を招來せしめた上に特に意義深きものがあつた。又彼がその『政治地理學』に於て法律的國家觀を拒否して有機體的國家觀を主張し、國家を以て「人類の一團と體制ある土地の一區である」(Der Staat ist ein Stück Menschheit und ein Stück organisierte Erde.)と稱し、又「土地に立脚せる有機體」(Der Staat als bodenständiger Organismus)ととなへてゐることは、現在ナチスの地政學者達がとなへてゐる「生活地域」の概念と相通ずるものがある。

然るにその後ラッツェルを學ぶものは、その本質を把み得ず、僅かにその形骸のみを學び、地理學の實踐的性格は次第に背後に押しやられるに至つたのである。フランス地理學界の代表

的人物の一人たるヴァロー（Vallaux）は、その著『土地と國家』(Le sol et l'étatx. 1911.) の序文に於て、ラッツェルの政治地理學を十分客觀的でなく、且つ現在を左視右顧し過ぎてゐると酷評し、自分は力の及ぶ限り之を眞の科學として取扱はんとするものであると宣言してゐるが、彼のラッツェルを非難してゐるところこそ、實はラッツェルの特色であり、又彼の宣言してゐるところこそ、その後の地理學研究の缺陷を指摘してゐるものに外ならない。

地理學に再び實踐性を喚び戻したものは、第一次歐洲大戰後、ヴェルサイユ體制の桎梏下に呻吟せる祖國ドイツを再建せんとする氣運のうちに生れた前記の地政學（ゲオポリティーク）の運動であつた。ハウスホーファー等は『地政學の礎石』のうちに於てドイツに於ける地政學の發展について次の如くに述べてゐる。

「オーストリアにおいて、戰爭と、殘酷な分割との恐るべき體驗の下に、殆んどすべての地理學的戰線において舊くから保持されてゐた諸力が新に息を吹き込まれ、改めて補充的地位に据ゑ置かれたのと同じやうに、ドイツ帝國の地理學者の世界においても、戰爭といふ強力な敎

師の影響の下に、その地理學をば意識的に、かつ力强く、祖國の事柄に奉仕せしめようとする自發的な意欲が現はれてきた。それは決して學說の體系的な發展などではなかつた。意欲は能力よりも遙かに大であつた。といふのは、多くの人にとつては、この領域における從來の訓練が全然缺如してゐたからである。しかし、それでも地理學が政治の進展に對して方向を指示し得るものであるといふ認識は非常に重要であつた。少くともこのやうな見解が、その後の政治地理學乃至は地政學の發展に廣汎な地盤を與へた。」と。更に同書の別項に於て次の如く述べてゐる。

「ある一つの民族が、例へばわれわれ獨逸民族の如く、驚くべき多大の犧牲を拂ひ、地球上の諸民族のなし得る水準を遙かに越えた仕事や勞作をなしたその擧句で、己が民族の生活形態の怖るべき破壞と、己れの生活空間の狂暴なる破碎、畸形化を經驗したとする。

このやうな場合、該民族は次の如き問題を提出するのは蓋し當然であらう。抑〻破碎されたかの生活空間にもともと定住し、民族のかの生活形態を先づ何よりも守護すべく委ねられてゐ

た人々は、一體如何なる點において缺くるところがあつたのかといふ問題これである。このやうな問題提出は斯ういふ人々に復讐しようといふ意圖からではない。何故なら復讐乃至後悔といふ如きものは何のプラス面もないからである。たゞわれわれの屋臺が、前と同じ様に缺點ある人々によつて、脆弱な砂や紙の地盤の上に建てられて、確固たる支への大地と枯れた土地の地盤上に築かれねばならぬことが無視されては一大事だからである。地政學が要請されるに至つたことも、政治的生活形態乃至民族の地盤、文化の地盤を、もつと立派に科學的に守護して行かうといふ第一義的な衝動からである」と。

以上の記述により、ドイツの地政學が、抑〻地理學をして現實的政治に役立たしめんとした地理學者達の念願より出發してゐることが充分に諒解せられるであらう。しかるに我が國に於て、地政學を論ずる際に、往々にして地政學は地理學にあらずとなすものがある。「地理學は靜態的なる學問であり、しかも純然たる客觀科學の立場より之を研究すべきである。之に對して地政學ははじめからその國の政治との關聯に於て研究せられるものであり、これは政治學の一

部門に屬すべきものである。地理學はその本來の立場を守るべきで、その埒外に出でてはならない。」といふのである。これは全くドイツ地政學發達の歴史を知らざるものゝ言といふべきである。實にドイツの地政學は上記の如く、第一次歐洲大戰後祖國ドイツに對する地理學者達のやむにやまれぬ氣持から發達したものであり、はじめから學說を體系的に樹立せんとしたものではなかつた。彼等は寧ろ地理學は須らく地政學たらざるべからずとまで云ひ得る氣持で、その研究に從事したものと考へられるのである。勿論現在に於てはハウスホーファーをはじめ多くの地政學者は、政治地理學と地政學との區別を論じてゐる。『地政學の礎石』に於ける「地政學は、地理學特に政治的空間有機體及びその構造に關する學としての政治地理學の廣汎なる基礎の上に立つ」との文句の如きは、その著名なるものである。

一應の業績の爲された後に於て、その跡を振返つて之を體系付けんとすればかゝる兩者の區別が考へられるのは當然である。それ故抽象的に論ずる場合は、政治地理學は靜態的な國家の結果的範疇を究むるもの、地政學は動態的なる國家の原因的範疇を究むるものであるといふ樣

に一應規定することも可能であらう。併し過去並びに現在に對する徹底せる研究は、必然に將來を指向すべきものであり、又將來に對する研究は、當然過去に爲され、現在生起しつゝある事實の確固たる基礎の上に立つて行はれねばならぬ。具體的研究に於ては、どこまでが地理學の領域であり、どこまでが政治學の分野である等といふが如き、判然たる區別が存するはずはない。それはドイツ地政學者達の實際の業績を見れば、直ちに諒解のゆくところである。

我が國に於ては、往々にして既に「つくられたるもの」としての地政學や政治地理學の理論のみを對象とし、具體的なるものを「つくるもの」として之を考へることが尠い。その結果は抽象的なる方法論を弄するのみに了つてゐる。理論は實踐に先立つものではなく、實踐を跡付け之を組織化し、それを更に發展せしむるのが理論であることを知らねばならない。ナチス今日の發展は、先づ實踐より始まるところにあつたことを銘記すべきであらう。

要するに、我等はいたづらにものゝ形骸のみを見ることなく、その本來の意義を根底に於て把握することが肝要である。ドイツに於いて發達せる地政學の意義は、第一には從來の地理學

が、現狀のまゝの諸事象、現狀のまゝの諸關聯の考究、謂はゞ存在（ザイン）の科學たるのみに終始してゐたものを、當に實現せらるべきあるべき姿の顯示、あるべき諸關聯の考究、謂はゞ當爲（ゾルレン）の科學としての性格をそれに具有せしめたところにある。言ひ換へればそれは學問と實踐との一體的立場の把握と云うてもよいであらう。從つて本質的には地理學は卽ち地政學であらねばならないといふ事にもなるわけである。更に第二の意義としては、ドイツの地政學はゲルマン民族を離れては存在しないといふところにある。屢說した如くドイツの地政學研究は、ヴェルサイユ體制の桎梏下に生れた。非ドイツ的なるものの克服としてゲルマン民族信仰のうちより生れたものである。從つてゲルマン民族に基礎を置かぬ地政學の研究はあり得なかつたわけである。勿論「生活地域」の概念が歐洲新秩序建設といふところにまで高められるに至つた今日に於ては、地政學研究の對象も、歐洲全般の國土經營といふところにあるわけであるが、併し、土地に根ざす民族の研究が、その根底をなしてゐることには變りはない。以下之につき「地政學」に關するドイツ地政學者の言を聽くこととする。

「地政學は本來自然科學卽ち物質に關する科學ではなく、一つの精神科學――人間及び人間の意志に關する學問――に屬するものである。國土或は民族を地理學的に考察するに當り、自然によつて制約せられた人間の環境世界に於ける物質的、自然的乃至は自然地理的現象が、直接問題ではない。地政學者の主なる關心は、山脈、溪谷、河川、並びに海洋、氣候狀態、及び地下資源にあるのではない。寧ろ地政學者は民族が自然的環境並びに生活地域に對して働きかける關係を考察するものである。

環境及び生活地域を再編成し、地理的並びにその他の自然的な制約を、あくまでも利用し、從つて必然的にそれを克服せんとする人間の名譽心は、根本的な人間の天性の一つである。人間のこの精神的、靈的本能、卽ち自然環境並びに生活地域を支配し、擴大し、再編成せんとする人間の永遠に續けられる努力こそは、地政學のそもそものテーマである。

人間の意志は集團を構成する。集團は民族を形成する。換言すれば集團が基礎になつて民族が出來てゐる。これが人間意志の活動力の最初の現はれである。人間の活動力の第二の段階に

於ては、集團、民族が、地表或は生活地域の一定部分を、彼等の故鄕、祖國、國家に構成する。民族と國家とは、創造的人間精神の最も重大なる二つの所產である。この兩者はそれぞれ一定の境界に結びついてゐる。民族といふ範疇は、種族的、社會的境界を考へずしては理解し得ない。國家の場合も亦然りである。民族並びに國家の境界は、人間の精神により永遠に制約されてゐる。精神的態度の轉換があると、また民族及び國家の境界に於ても再編成が行はれる。それ故、境界の變遷は、言はゞ地政學の主要テーマとして考へることが出來よう。

併し民族の境界が必ず國家の境界と一致するといふ風に無造作に斷言してはならない。民族の境界が、國家の境界と非常に隔つてゐることは、極めて多い。これ等各種の境界の間の關係が、如何なるものであらうとも—地政學に於ける最も重要なる要素は、人間精神が時代時代によつて、民族及び國家に對し新しき境界を引かんと企圖したその事實である。地政學は民族及國家—従つてその生活地域の境界の變遷に關する學問である。

人間意志の動的作用力は、いかなる時期にも、山脈、河川、氣候、その他の自然的地理的事

象に對し、之を支配し、制約する力である。」
(Benoy Kumar Sarkar: Grundfragen der Geopolitik,—angewandt auf das indische Volk. ハウスホーファー七十歳記念論文集)

以上を要するに、ナチスの地政學は、存在を存在として見るに止らず、その民族信仰に基く理念の實現を目標として、現實の矛盾を打破改革せんとする欲求より生れた實踐の學であつた。この意味に於て地政學そのものも亦戰より生れた戰ひの學であつた。こゝに舊秩序的欺瞞と矛盾とが剔抉打破せられ、かゞやかしきナチス・ドイツ今日の勝利を導く契機があつたのである。

國境の拂拭

第一次歐洲大戰後民族自決主義の名の下に、世界の各地に多くの弱、小國家が成立した。

ヨーロッパに於てはフィンランド、エストニア、ラトヴィア、リトアニア乃至はポーランド、

ヨーロッパに於てはフィンランド、エストニア、ラトヴィア、リトアニア乃至はポーランド、チェッコスロヴァキア、ユーゴースラヴィア等があり、アジアに於てはサウヂ・アラビア(大戰後先づヘッヂャス王國出現、後ネジドのイブン＝サウドによつて併合され、ヘッヂャス＝ネジド王國となつたが、一九三二年之を現名に改稱)、イエーメン、イラク等の諸國が生れ、アフリカに於てはエヂプトが獨立した。その他新たに委任統治なる形態が生れ、舊ドイツ領植民地や、トルコ領であつた地方がそれぞれ列强の手に分けられたのであつた。

この世界地圖の塗り代へによつて、イギリスを中心とする舊秩序的勢力にとつて、都合よき態勢が世界に亘つて確立せられるに至つたのである。實にこゝに新たに出來上つた世界の政治區劃の多くは、自然的秩序に從つて決定せられたものではなくして、寧ろ舊秩序的諸國の繁榮に都合よき樣に定められた極めて人爲的、不自然なるものであつた。卽ちその根本としては先にも一寸觸れた如く、弱小國を分立せしめることによつて、これ等の國々を政治的に經濟的に自立し得ざる如くなし、これ等强國がそのイニシアチブを握るといふ方針のもとに決定せられ

たのであり、又その細部に亘つての國境線の劃し方に於ては、これ等强國の有する利權に關聯してゐる場合が多かつた。例へば西南アジアに於ける新興國の國境線は、油田乃至は送油管の利權との關聯に於て決定せられてゐる面が多い。その極めて最近の例を擧ぐれば、イラン灣奥に位置するアバーダン島の所屬問題がある。同島は長くイラン、イラク兩國間にその所屬が爭はれてゐたが、一七三七年以來イラン領と決定せられた。併し自然的に見れば、同島は寧ろイラクに屬するのを至當としてゐる。此の島の周圍を流れるチグリス・ユーフラテスの河水は、イラク側と同島との間よりもイラン側と同島との間の方が交通に不便で、イラン領と決定した今日に於ても、事實上同島はイランより切り離された孤島の觀がある。かくの如く自然的秩序を無視して所屬を決定するに至つた理由は、同島に世界最大と稱せられるイギリスの精油工場があり、又同島がアングロ・イラニアン石油會社所屬の送油管の終點に當つてゐる事實より直ちに諒解せられるであらう。

かゝる事實は新國境線劃定の場合には到る處に於て見られた。而もかくして成立した不自然

た國境線を、所謂國際法なるものは之を恰も侵すべからざるものゝ如くに思はせて來たのであつた。そして地圖上に劃された單なる一線が、百萬の軍隊をも支ふる鐵壁となつてゐたのである。イギリスはどれだけこの國境不可侵觀の恩惠に浴して來たかわからない。その廣大な植民地を、充分なる軍備もなしに今日まで保持し得たのは、全くこの國境觀によつてゞあつた。

ナチスがドイツを再建するためには、舊秩序的勢力によつて固められてゐたかゝる世界の政治體制を打倒せねばならなかつた。それにはかゝる國境に對する不可侵觀を打破し、現實の不自然な國境を地圖上より拂拭せねばならなかつた。オットー・マウルやハウスホーフェル等が、境界に對し生物地理的本質を强調してゐるのは、從來の國境觀の否定であり、先述せしナチスの「生活地域」なる概念もまた、從來の國境拂拭を意味してゐるものに外ならない。最近のドイツの地圖帖が、世界の政治區劃圖を載せる代りに、地勢圖、氣象圖、海流圖、生物分布圖、民族分布圖等を豐富に挿入してゐるのも、かゝるあらはれの一つである。

ナチスの國境拂拭の具體的あらはれは、ドイツ國内に於ける國境の拂拭、即ち長くドイツの統一を妨げてゐた聯邦制度を撤廢して、統一國家を形成するところより始まつた。更に云へば、ドイツ人個人の心の中にある國境を除去するところより始まつたのである。

先述の如くドイツ國土の統一を困難ならしめてゐるものには、自然の制約、列强の干渉等があつた。併しそれは更にはドイツ人個人の心の中に既に國境が存してゐたところに原因してゐた。ナチズム世界觀はゲルマン民族主義を稱することにより、先づこの個人の心の國境を拂拭せしめた。そこに自然の制約性も發展性に轉換し、國土の統一を實現することが出來ることとなつたのであつた。

なほ之と共にドイツ國土の統一を促進せしめたものとして、國營自動車專用路（ライヒス・アウトバーネン）の建設がある。ライヒス・アウトバーネン建設の意義が失業者の救濟、交通運輸の促進、延いては産業の興隆、乃至は國防上にあつたことは普通に云はれてゐるところであるが、その他にドイツ國内の國境拂拭にもあつたことに注意すべきであらう。國土の統一を先決條件としたヒットラ

ーは、一九三三年、その政權を獲得するや、旬日にして七、〇〇〇粁に亘るライヒス・アウト・バーネンの計畫を發表し、早くも同年九月二十三日には、フランクフルト・アム・マイン—マンハイム間路線の建設に着手した。この大動脈の建設により、ナチスは今迄各個ばらばらに生存してゐた小地域に、血を通はせ、神經を通じ、全體の部分としてこれ等地域を甦らしめたのであつた。

次にナチスの國境拂拭は、外に向つては一九三五年三月の軍事條項廢棄宣言に伴ふ、ラインランドの進駐にはじまる。ラインランドはフランスと境を接するドイツ國防上の要地である。而も葡萄あり、鐵あり、石炭あり、各種工業亦極めて旺んで、産業上より見てもドイツに於て最も惠まれた地帶をなしてゐる。その上歴史的にもドイツ文化發祥の地とも云ふべき地帶で、西方ドイツの生命線を構成してゐた。それにも拘らず十八年間といふものは一片の國際條約によつてドイツ軍の進駐は防止せられ、裸のまゝにてこの重要地帶がフランスに對して暴露せられてゐたのであつた。併し今やドイツ軍の進駐によつて、ドイツの實力の前には國際條約も一片の

反古と化するに至つたのである。

次いで獨墺合邦、ズデーテン地方併合と次ぎ次ぎに打たれたナチスの手は、この歪曲せられたヨーロッパの國境を拂拭せんとする目的に沿うて爲された行動であつた。今やナチスは着々として歐洲新秩序建設の戰に從事してゐる。これ實にヨーロッパの不自然なる國境を全面的に否定し、そこに自然的秩序に於て新たなる國境を劃定せんとするものであり、新秩序はまさしく眞秩序を目指してゐるものに外ならない。これこそナチスの向はんとする具體的地理建設の最も顯著なるものと云ふべきであらう。ナチス地政學の目標も亦こゝにあつたことは既述の通りである。

持たざる國より持てる國へ

外交は從來云はれてゐるが如く單なる外交の分野のみにて決定せられる問題ではない。國家

の總力、殊にその根底をなす武力が、外交を決定する有力なる條件である。從つてナチスが、ヴェルサイユ體制の鐵鎖を斷ち切り、祖國ドイツを再建するためには、國力、就中その軍備を充實することが特に肝要であつた。

然るにドイツは、敗戰の結果その國土の鐵、石炭、加里等の所謂重要資源を多く包藏する地方と、悉くの植民地とを失つた。そして殘された國土に於て、殘された耕地と、殘された石炭と岩鹽と森林と、而してまた限られた鐵鑛とによつて、六千六百萬の大人口を養ひ、その國力を充足して行かねばならなかつた。加之、之と關聯して惹起した經濟界の混亂によつて、産業は極度に萎靡し「持たざる國」としての辛酸を、ドイツは具さに嘗めさせられてゐたのである。かゝる狀況の下に於ては、假令ドイツが如何に努力したとしても、既に「持てる國」と成りおほせてゐた英米を向ふに廻して、之と對抗し得るだけの國力を充實して行くことは、殆んど不可能と見られた。而もナチスはその不可能を次第に克服して行つた。一九三八年三月の獨墺合邦殊にその後半年にしてなされたチェッコのズデーテン地方併合。

かくの如く次ぎ次ぎに斷ち切られて行くヴェルサイユの鐵鎖を目前に見ながらも、英佛側は遂に之を阻止し得なかつた。それは一つには、その前年の十一月獨伊三國間に締結を見た防共協定が、英佛を牽制したことによるのは申す迄もないが、一つには既にこの當時に於て、早くも相當程度充實を見せるに至つたドイツの國力、就中軍備が、無言の威壓を加へてゐたことによるものである。殊にズデーテンの場合は、先に一九三五年三月のヴェルサイユ條約中の軍事條項廢棄宣言、翌三六年三月のロカルノ條約破棄通知並びに之に伴ふライン・ランド駐兵等に於て、寧ろドイツ側に好意を寄せてゐたイギリスも、今回は流石に默し兼ね、あはや戰端が開かれるかと思はれたのであつたが、ドイツの實力の前には抗し得ず、遂に事なきを得て無血のうちにドイツ側の壓倒的勝利に終つたのであつた。

これ等二國の併合により、ドイツは有力なる資源並びに工業地帶を確保することが出來、爾來ドイツの軍備は急速に整ひ、今次の大戰に於ては尨大なる機械化兵團、莫大なる新鋭兵器を擁して、綽々たる戰鬪振りを見せてゐることは周知の通りである。

ナチスをしてこの不可能を可能ならしめた根底には、屢說の如く世界觀の轉換が見られる。殊に新らしい世界觀は必然に資源に對する着眼を轉換せしめた。而してこの新らしき着眼のもとに資源を考へたところに自らにして前途は開け、新たなる資源の創造がされて行つたのである。

抑ゝ從來資源と云へば、既成の經濟地盤に於て、卽ち個人主義的、自由主義的營利經濟の立場に於て、而も既成の技術、既成の生產施設を以て處理するに適した原料資源のみを指してゐた。例へば鐵資源と云へば、普通ヨーロッパ式製鐵法を以て處理するに適した鐵分五〇—六〇%以上の富鑛、而も拳大以上の磁鐵鑛のみを指して居り、採算上引合はぬ磁鐵鑛の貧鑛、又は粉鑛乃至は砂鐵、更には品位高きも脆弱にして碎け易く、ヨーロッパ式製鐵法に適せぬ赤鐵鑛雲母鐵鑛等は殆んど問題とされてゐなかつた。又アルミニウム資源の如きも、フランスに於て發達したバイアー濕式法の如きに適するボーキサイト原鑛のみを意味し、今や我が國に充分な利用價値を見出されんとしつゝある礬土、頁岩、粘土等に豐富に含有せられてゐるアルミニウ

ム分の如きは、之を考慮に加へてゐなかつた。石油にしても天然石油のみがその資源であり、又ゴムと云へば馬來、蘭印等で殆んど獨占的に栽培せられてゐる植物性ゴムのみを意味し、衣服の原料としては殆んど大部分が羊毛、綿、麻等であつた。

以上の如き立場に於て考へられた資源は、既に英米等の舊秩序諸國によつて、その殆んど大部分が確保せられてゐた。從つてそれ等を基準として資源狀態を考へる限り、英米等の諸國は實に世界に於ける最大の「持てる國」であり、之に對し我が國や獨伊の如きは永久に「持たざる國」として、英米のしりへに追隨して行くより外はない。而も從來我が國の如きは、往々にしてかゝる條件に於て生産せられるもののみを資源と見做し、之を前提として國力を評價し、或は各種の計畫を樹立せんとしたが爲に英米依存の考へより容易に脫却することが出來なかつたのである。

資源はかゝる條件の下に固定されてゐるものではない。動かし得るものであり、動かすべきものである。ナチスは從來の個人主義的自由主義的立場に立つ靜止的、固定的資源觀より脫し

て、全體主義の立場より資源を主體的、動的に把へた。そしてそこに新たなる限界が開かれて行つたのである。

例へば前記の鐵資源にしても、個人的利潤を超越して國家全體の立場より處理することとなれば、これ迄資源となし得なかつた磁鐵鑛の貧鑛は勿論、赤鐵鑛、雲母鐵鑛乃至は砂鐵等をも資源化することは比較的容易である。ドイツは前大戰の結果アルサス・ローレンの豐富なる鐵産地を失ひ、その必要とする鑛石の大部分は輸入に俟たねばならなかつた。ナチスが政權を確立した當時に於て、ドイツの鐵鑛石使用量はザールを入れると約一、六七〇萬瓲に達し、その中約一、〇〇〇萬瓲は主としてスエーデン、スペイン等から輸入してゐた狀況であつた。かくの如き事情の下に軍備を充實することは極めて困難であつたが、幸にしてドイツ國内には、採算上は有利ではないが貧鑛としての鐵鑛ならば相當量の埋藏があつた。ナチスはこの貧鑛を利用することに決し、先づ一九三四年、貧鑛二〇〇萬瓲を各製鐵業者の前年度の銑鐵生産高に按分して割當て、同年度に於て强制使用せしめた。未だ充分なる貧鑛處理方法が發見せられてゐ

なかつた當時のこととてこの計畫は充分なる效果を納めることは出來なかつたが、各製鐵會社は之を契機として貧鑛處理方法の研究に專心從事し、政府亦これが助成につとめた。その結果クルップの直接製鐵法、ザハトレーベン法等が考案せられ逐次工業化せられるに至つた。しかしこれ等は未だ富鑛處理の一部として採算し得る範圍内に於て實施せられてゐた爲、この程度ではドイツ國内の貧鑛を全面的に活用するまでには至らなかつた。玆に全く利潤を度外視して、貧鑛のみを處理し、年産四〇〇萬瓲の銑鐵、六〇〇萬瓲の鋼塊を得んとするヘルマン・ゲーリング大製鐵所の劃期的計畫となつたのである。同製鐵所は品位は僅に二五%―三五%の貧鑛であるが、埋藏量實に二〇億瓲に及ぶと推定せられるザルツギッター地方の鑛區上に設けられ、一九三七年その設立を見た。

この製鐵所の設置により、ドイツに於て資源として認め得る鐵鑛は飛躍的に擴大せられるに至り、國防資源の根幹たるべき鐵資源に關する限り、ドイツは「持たざる國」より「持てる國」への轉換が約束せられることとなつたのである。この事は現實的にドイツの軍備を充足する上

に非常なる貢獻をなすこととなつたと共に、萬一他國より鐵の供給が斷たれたとしても、やり通し得る明るい豫想と、自信とをドイツに與へた。これやがてオーストリー乃至はチェッコの併合を可能ならしめる重大な原因となつたのである。而してドイツはその後この兩國の併合を實現することによつて、極めて良質の鐵產地を加へることが出來た。この事は更にドイツその後の發展を約束した。こゝに次の段階としてドイツは再びルクセンブルグやアルサス・ローレンの鐵を獲得することゝなるのである。かくてナチス・ドイツは、今日に於ては世界屈指のスウェーデン鐵をも事實上その手中に握り、舊秩序的意味に於ても世界第一流の鐵產出國たる資格をそなへ、綽々として舊秩序打倒の戰を續けつゝある現況である。

從來の經濟地盤を、又從來の資源觀を克服した上にうち建てられた以上の如き貧鐵處理は、やがてドイツをして富鑛獲得の道を開かしめたのであつた。

かゝる事實は、また石油に關しても見られるところである。

ドイツは第一次歐洲大戰前より石油は殆んど有してゐなかつた。そこでドイツはメソポタミ

ア地方の豐富なる石油資源に逸早く着眼し、各種の手段を用ひて之が獲得を計つた。例の三B鐵道政策の如きは、一つにはこの石油資源を目指したものに外ならなかつた。この計畫は英國側の猛烈なる妨害に遭ひ、充分なる效果を納めることが出來なかつたが、それでも當時に於ては今日程に石油の重要性も認められてゐなかつたので、石炭の豐富なドイツとしては、左程までに苦痛とは思はなかつた。しかるに大戰中より石油の重要性が次第に認められ、大戰末期には「石油の一滴は血の一滴に値する」とまでに考へられるに至つた。今日に於ては軍艦、飛行機、戰車、自動車をはじめ、如何なる新鋭兵器と雖も、石油なくしては殆んどその用をなさぬ狀況となつて來てゐる。この時に當つてドイツは、國外の石油權益を失ひ、外國石油會社への參與權をすらすべて失つた上に、あまつさへ本國の油田として僅かに存してゐたアルサスのペヒェルブロンの油田をも奪はれ、國內石油消費量の殆んど大部分を外國に依存するの已むなき狀態となつてゐたのであつた。

この苦難を克服する爲、ドイツに豐富に存する石炭を原料とした人造石油の研究が、先覺的

なフリードリッヒ・ベルギュウス博士やフランツ・フイッシャー教授等の手によつて默々として續けられ、實驗室的には成功を見てゐた。併し何分にも天然石油の廉價な爲、從來の營利經濟の立場に於ては之を企業化することは困難であつた。勿論この間にあつてイー・ゲー染料會社の如きは巨額の費用を投じてベルギュウス博士の研究を援助し、輿論の反對を押し切つて一九二六年には年産一〇萬噸の褐炭液化の試驗工場をロイナに設け、翌年より操業を開始してゐた。しかしそれ以上に本格的に規模を擴大することは容易でなかつた。

ナチスは政權を把握するや、國家的見地よりこれ等の研究を大いに助成し、その研究に於て得たる結果を大規模に工業化することに努めた。一九三三年十二月にはロイナ工場に石炭液化設備の建設が完成し、一九三四年にはドイツ國內の褐炭煉炭會社、ドイツ石油會社、イー・ゲー染料會社、製鋼會社、電氣工業會社等を大株主出資者とする政府指導の「褐炭ベンヂン會社」(Braunkohlen Benzin A. G. 略稱(Brabag)の創立を見、これが人造石油工業に大々的に着手することになつた。かくて一九三四年末には、早くも大量生產の可能となつたドイツの合成

ベンヂンが、自動車と航空機とを動かすに至り、諸外國に非常な衝動を與へたのである。玆に於て石炭、褐炭の豐富なドイツは、石油資源についてもまた「持てる國」としての可能性を保有することゝなつた。これは貧鐵の處理と共に、その後のナチス・ドイツの發展に寄與するところ極めて大なるものがあつたと共に、この事によつてドイツは、やがてポーランド油田やルーマニアの豐富なる油田を確保することが出來たのであつた。

鐵、石油のみではなかつた。ゴム、纖維、樹脂、蛋白等をはじめ、直接軍需以外の各方面に亘つても、ナチスは新たなる觀點より、獨自の方法、獨自の施設を以て、新資源を續々と創造して行つた。その着眼に於て最も注目すべきは、從來の資源が主として特殊なるものに限られ、特定の國によつて獨占せられてゐたのに對し、「持たざる國」としてのドイツの着眼が、比較的普遍的に存在するものゝ資源化にあつたことである。これ實に舊秩序的資源に對する新資源の戰であり、これによつて今や從來の所謂「持てる國々」の特權は、次第に無力化せしめられつゝある狀況である。

これ等新資源のうちで、最近頓に著名となつて來たものに合成ゴム「ブナ」がある。周知の如く世界の殆んど大部分のゴム原料は、印度支那半島、印度支那諸島、セイロン島等より產し、英國が之を獨占してゐた。之に對し「ブナ」は石炭及び石灰を原料とし、ドイツとしては殆んど無盡藏に近い資源を擁してゐるものである。而もその品質は天然ゴムに酷似してゐるのみならず、或性質に於ては寧ろそれを遙かに凌駕してゐると傳へられてゐる。

例へばブナNは老化後も天然ゴムの五割增の荷重に耐へ、又磨耗に對し耐久性が三割以上も大であり、更に日光に暴露されても天然ゴムの如く龜裂を生ずる恐れがない。又ブナSの如きは耐熱性强大で、一五〇度の溫度に數日間曝されても尙使用に耐へると云はれてゐる。殊に最も注目すべきは、天然ゴムに眞似の出來ぬ耐油性あることである。聞くところによれば、ドイツは今次大戰の電擊進軍に際して、パイプを敷設して燃料油の補給を行つたとの事であるが、そのパイプの接手にこの耐油性ゴムを使用し、如何に速かなる進擊に際しても燃料油の補給を斷たなかつたと云はれる。かゝる實狀を見る時、合成ゴムはドイツに於ては最早單なる天然ゴ

ムの代用品ではなく、新らしき重要資源となつてゐることが知られるであらう。

これは人絹、ス・フ等についても云はれることで、今日ドイツに於ては、人絹やス・フは既に木綿、絹、羊毛等の代用品としての域を脱し、英米舊秩序諸國の資源獨占に對する有力なる戰士として、目覺しき活躍を續けつゝある實情である。

かくて「持たざる國」ドイツは、ナチスの政權獲得以來、「持てる國」ドイツとしてあざやかなる轉換を行ひつゝある。而もその轉換の過程に於て新たなる發展の道が開け、而して新たなる資源の獲得によつて、また次のドイツの發展が約束せられて行つた。玆にドイツは今や生產面より見るもその相貌を一變せんとしてゐる。これこそナチスが、現實に、刻々に、實踐して行つた地理建設に外ならない。それにつけても舊來の靜止的、固定的資源觀に立つ國力の評價が、如何に無意味なものであるかゞ、充分に諒解せられるであらう。

以上を要するに、ナチスは舊來の資源狀況を基礎としてその嚮ふべきところを決定したのではなくして、その世界觀に立ち、その民族主義に基いて、逆に資源を如何になすべきかを考へ

た。そこに眼界は自らにして開け、新しき資源の創造が期待されると共に、現實のドイツの産業景觀を刻々にドイツ的に變じて行つたのである。

ゲーリング元帥は、一九三七年十月、ヘルマン・ゲーリング製鐵所建設工事の進捗振りを視察すべく、ザルツギッターを訪ねた。その際同元帥は、製鐵所の總指揮官たるプライガー博士以下を前にして、大いに彼等の業績を讃へ、今後更に極力事業の促進を計り、この製鐵所がアドルフ・ヒットラーのドイツに於ける不動の礎石となるやう一層奮起されたいと激勵する所があつたが、その挨拶の中に於て、「不可能」といふ字を辭書から抹殺せよと叫んだナポレオンの如く、ヒットラーの口からも「旨く行かぬ」(Es geht nicht) といふ言葉は最早や絶對に洩れることがない。全關係者一同ナチス本來の實行力と不撓不屈の精神とを以て、着々此の國家的難事業の完成に向つて一路邁進すべきである。といふ意味のことを述べたと報ぜられてゐるが、これこそナチス資源觀の根本精神に外ならない。

海洋より空中へ

海洋の重要性は、前記のラッツェルの言を俟つまでもなく、古來發展的なる民族はすべて之を熟知してゐた。內陸國は海洋に出でんと努力し、沿岸國は海洋を乘り越えて對岸に到達せんと努め、更には海洋を包圍しようと努力する。就中この最後のもの、卽ち海洋を包圍して之を自己の湖と化せしめんとする運動は、これをマレ・ノストロ（Mare Nostro）運動と呼ばれ、最も注目すべきものであり、この段階に至つて海洋の支配は、はじめて全うせられるのである。從つて發展段階にあつた諸民族は、概ねこのマレ・ノストロを形成せんとして努力して來た。この言葉もイタリヤ人がアドリア海を我が海とせんと主張したところに由來してゐる。古くはカルタゴが紀元前六世紀から三世紀の頃に、西部地中海を自國のマレ・ノストロたらしめんとしたが、第一ポエニ戰爭によつてその企ては挫折せしめられた。次いでギリシヤ民族に

よつてエーゲ海がマレ・ノストロとなつた。地中海全體がマレ・ノストロとなるに至つたのは、ローマ人の時代のことであつた。黒海も北海もバルチック海も、皆それぞれの民族によつて、又それぞれの時代に於て、マレ・ノストロたらしめんとする努力が續けられた。而して太平洋は、上代に於ては實に我がスメラ民族のマレ・ノストロであつたことが考へられ、又降つて中世より近世にかけては、すくなくも亞濠地中海の一帶は、我が八幡船隊によつてマレ・ノストロたらしめられてゐたのであつた。

マレ・ノストロの最も大規模なるものは、普通にはイギリスによつて形成せられた今日の印度洋とされてゐる。印度洋並びにその緣海の海岸のすべての重要なる部分は、現在イギリスの掌中にある。それは印度をはじめ、ビルマ、マレー、シンガポール、オーストラリア、アデン、ケニア、南阿聯邦等の如く、イギリス直接の植民地である場合もあれば、タンガニイカの如き委任統治の形態を採つてゐるものもある。又イラク、タイ、イラン、オーマン、蘭印、葡領東アフリカ等の如く、獨立國であつてもイギリスによつて實質的に支配されてゐるところも

ある。

たゞ僅かにソマリランドをはじめ少數のあまり重要ならざる部分のみがヨーロッパの他の國に屬してゐるに過ぎない。而も伊領ソマリランドの如きはその鼻先きにソコトラ島乃至はセイシエル諸島等の英領地があり、又マダカスカルはモーリシヤス島によつて常に監視せられてゐる狀況である。

以上の如く印度洋は確かにイギリスによつて完全にそのマレ・ノストロたらしめられた範域である。併しイギリスのマレ・ノストロは、印度洋の如き局部的海洋のみではなかつた。近世以降、世界の七つの海に亘つて、そのマレ・ノストロがほゞ完成せられてゐたと考ふべきであらう。たゞ大洋に於ては、內海、地中海とは事情が異り、その周緣の陸地を完全に支配することは容易でなかつたし、又その必要もなかつた。寧ろ海上交通の要衝を確實に把握することにより、假令內海、地中海に他國の支配が及んでゐても、之を無力化せしめ、全洋に亘つてその制覇を可能ならしむることが出來る。嘗てドイツは第一次歐洲大戰に際し、オーストリ

ア、ハンガリア、それにブルガリア、トルコを同盟軍に加へ、北海、バルト海より、アドリア海、エーゲ海、東地中海等を經て、イラン灣乃至は紅海に至る海洋の沿岸を確保してゐた。併し北海、バルト海は、北はノールウェーとイギリスとの海上に於て、西はブルターニュ半島よりコーンウォール半島の間に於て聯合軍によつて封鎖せられ、又地中海はジブラルタルに於て、紅海はアデン、イラン灣はオルムス海峽に於て、いづれも聯合軍によつてその出口が押へられてゐた。從つて海上に於ける活動は甚だしき制約を受け、無制限潜水艦戰を以て之に對抗したが遂にその形勢を挽回することが出來なかつたのである。

イギリスは全世界に亘るこの海上の要點把握に向つて、周到に、着實に、實踐して行つた。試みに現在に於けるイギリスの海軍根據地、要塞、燃料供給地等を地圖上に跡付けて見るならば、イギリスはその目的をほゞ達成してゐることに氣付くであらう。

（別表參照）

英國の本國以外に於ける海軍根據地及び要塞燃料供給地

(1) 海軍根據地

1、ハリファックス　2、ベルムダス　3、ジブラルタル
4、マルタ　5、ボンベイ　6、シンガポール
7、香港　8、シドニー　9、シモンス・タウン

(2) 要塞燃料供給港

1、キングストン　2、フリータウン　3、ケープタウン
4、ダーバン　5、マウリシウス　6、アデン
7、カラチ　8、コロンボ　9、マドラス
10、カルカッタ　11、ラングーン　12、木曜島
13、フリマントル　14、アルバニイ　15、アデレイド
16、メルボルン　17、ニューカッスル　18、ブリスベーン
19、ホバート　20、オークランド　21、ウエリントン
22、リイッテルトン　23、ダネデイン　24、エスクイマルト

(3) 海軍用として使用出來る商業用ドライ・ドックの所在地（×浮游ドック）

1、カナダ——

ハリフアックス　モントリール　クエベック　プリンスルーパート

2、オーストラリア——

シドニー　ブリスベーン

3、ニュージーランド

オークランド　リイッテルトン　ヅネデイン

4、南アフリカ

ケープタウン　ダーバン（×）

5、ニューフアウンドランド

セントジョーンス

6、印度

ボンベイ　カルカッタ

7、東方植民地

コロンボ　シンガポール（×）　香港

（佐藤弘氏「政治地理學概論」による）

ナチスの政權を樹立した頃に於ては、世界の海洋はこのイギリスをはじめ、それに米、佛、

五、ナチスの地理建設

蘭等をも加へた舊秩序的勢力によつてほとんど完全にマレ・ノストロ化されてゐたのであつた。而もドイツは、ヴェルサイユ條約によつてその海軍力は戰闘艦六隻、驅逐艦十二隻、水雷艇十二隻、輕巡洋艦六隻及びその他の總數十萬八千噸に制限せられ、その商船の多くも賠償金の一部として列國に移讓せしめられ、あまつさへ海洋に出づる爲の河川すらもが、國際河川としてその自由を奪はれてゐたのであつた。

この舊秩序的勢力による海洋の桎梏を斷ち切らんが爲に、如何に海洋より之を攻めても既に鐵壁となつてゐるその守りを破ることは殆ど不可能なことであつた。こゝにナチスは新たなる空間に着眼し、空中制覇によつて英國の海上制覇を無力化せんとしたのである。「空にはジブラルタルなし」といふのがその着眼であつた。ナチスはこの目標に向つてその全力を傾注した。併し當時ドイツはヴェルサイユ條約によつて空軍の保有が絶對に禁止せられてゐた。たゞ一九二八年以來飛行機の製作が許されることゝなつたので、その製作に努力すると共に商業航空路の擴充に力を致し、國内は勿論、歐洲各國との間に網目の如く航空路を張つて行つた。一九三四年

二月にはドイッチエ・ルフト・ハンザ航空會社は、多大の犧牲を拂ひ、世界最初の南大西洋橫斷定期航空路を開設してゐる。かゝる一方、祕密裡にゲーリングを中心に前大戰の經驗に基き、空軍再軍備計畫を研究してゐたが、一九三五年三月、突如空軍部隊の整備を宣言し、忽ちにして世界第一流の空軍を備へて行つた。一九三八年のズデーテン問題を繞るミュンヘン會議に於てイギリスが遂にドイツの主張のまゝに動かざるを得なかつた理由の有力なる一つは、ドイツ空軍の實力を恐れたが故に外ならなかつたのである。

なほこの空軍の建設に全力を傾注したことは、ドイツの科學、技術、產業界をその全般に亙つて向上せしむる結果となつた。卽ち航空機は時々刻々に進步し、時代の最先端に位するものであり、最高の科學、最新の技術、最新の施設を要求する。從つてナチスが世界最優秀の空軍を整備するためには、世界最高の科學、技術、乃至は最新の施設を必要としたのである。ドイツに於ける人造石油も、人造ゴムも、その他の新らしき資源も、この空軍建設に伴つて、その發達が促進せられて行つたものが極めて多い。

ドイツのかゝる空への建設に對して、イギリス、アメリカ等の舊秩序諸國もただ默してゐる筈はなかつた。之に對抗すべく必死となつて航空路を延ばし、飛行機製作工場を增設し、空軍を擴充して行つた。玆にドイツと舊秩序諸國との間に空中制覇の激しい戰ひが展開せられることとなつた。

この戰ひに最後の決を與へるものは、その數に於ては經濟力であり、質に於ては科學と技術と而してまた之を運用する人であつた。總統（フューラー）を中心に一糸亂れざる總力戰體制を樹立し、擴散してゐたエネルギーを一體として用ふることの出來たドイツ經濟力には、從來の經濟觀念を以てしては計り知ることの出來ぬ强固さがあつた。而もそれは先にも述べた如く、擴大再生產の形に於て刻々に增大して行つたのである。科學や技術に於ても、確固たるナチズム世界觀に立ち、科學を、技術を戰ひとして觀じたナチス科學者、技術者達の眞劍な總力的努力は、他の容易に端倪すべからざるものがあつた。最近よくドイツはユダヤ人を排斥して以來、その科學は低下したとの聲を聽く。成程從來云はれた如き抽象化せられた科學——それは寧ろ科學の表

現形式乃至は表現技術だけに過ぎないものであるが——はナチス・ドイツには與らなかつたかも知れない。併しそこには新らしい科學概念に立つ具體的なる科學の發達があつた。そしてそこに優れた航空機も生れることが出來たのである。

以上にもまして勝敗を決定的ならしめる最後のものは人間の精神力である。經濟も、科學も、技術も、生產も、それは悉く人間の精神力によるのである。之についても、ゲルマン民族に對する奉仕の念に燃えるナチス・ドイツの人達の精神力と、個人主義的、打算的立場にある自由主義諸國の人々の精神力との間に霄壤の差のあることは申す迄もない。

今や歐洲に於ける動亂は、この勝敗の決を事實に於て我々の眼前に提示しつゝある。こゝにも我等はナチス・ドイツの空に對するかゞやかしい地理建設を見ることが出來るのである。

以上を要するに、ナチスの新らしい地理觀は、從來の國境、資源、乃至は海洋等に對する誤まつた觀念を剔抉し、そこに具體的な新らしい國境、新らしい資源、而してまた新らしい空間たる空に、ドイツの新たなる景觀建設を可能ならしめて行つたのである。

結言

以上ナチスの地理建設について述べて來たが、その特色を一言にして盡せば、從來の世界觀の轉換にある。ゲルマン民族の über alles に對する絕對の信仰に基礎を置く新らしい地理觀に立つ地理建設である。民族にすべての焦點を合せ、この民族よりすべてを考へんとしたものである。これは從來の個人主義的自由主義の立場に對する根底的な批判であり、而してまたそれが正當であつたことは、ナチス・ドイツ今日の勝利の事實を見ても充分諒解出來るところである。

併し乍ら、我々としてこゝに深く考へねばならぬことは、この「民族」に重點を置く考へ方である。ナチスが民族に重點を置いてゐるから、我々も亦民族より出發せねばならぬと考へる

ことは、根本的に誤りである。ドイツは民族以外にその絶對性を考へ、人心の歸結を考へる中心を有してゐなかつたが故に、民族以上に出ることが出來なかつたのである。彼等の達し得る最高の境地が、實に「民族」であつたのである。

ユダヤ敎の發展としてのキリスト敎に於ては唯一最高絶對なるものをエホバに求めた。しかしエホバは現實には具現してゐない天の彼方にある抽象的神であり、地に足場を有しない普遍的な神である。この抽象的、普遍的なる神の中間に、具體的な土地に根ざす「民族」を介在せしめ、それに歸結を求めたのがナチスであつた。こゝに從來の抽象的なる世界觀に具體性が與へられた。併し乍らその考へが民族に固着してゐる以上、歐洲新秩序の建設を考へるに當つても、ゲルマン民族による指導といふところより一歩も出られず、矢張りそこには從來のヨーロッパ的强權主義の殘滓が存することを、如何ともすることは出來ない。

之に對し我が國には、無始無終、絶對の中心にまします　天皇のおはしますあり、御稜威のもと世界萬民みなすめらみたみとして、そのところを得るところに、すめらの道があるのであ

り、この道こそ實に最高絶對の境地に外ならない。

我等の究極の目的は、皇道を世界に宣布し、八紘一宇の御聖旨を世界に具現するにある。ここにはもはや現在云はれてゐるが如き意味に於ける民族の概念は存在しない。すべてみな「すめらみたみ」として御稜威を仰ぐ世界がそこにある。我等の日本地理學は、かゝる世界眞秩序建設に積極的に參與する、新時代創造の計畫に方向を指示する、創造せらるべき正しき歴史に指針を與へるがごときものであるべきである。この場合、我等の地理學は、もはや西洋流にポリティークの名を以て呼ばるべきものではないであらう。最近小牧實繁博士の上梓せられた『日本地政學宣言』は、このすめら地理學の使命を我等の眼前に明示せられてゐる。（終）

發行所 東京市神田區神保町三丁目一三

アルス

電話九段二一七五・二一七六

振替東京二四八八八番

り、この道こそ實に最高絕對の境地に外ならない。

我等の究極の目的は、皇道を世界に宣布し、八紘一宇の御聖旨を世界に具現するにある。ここにはも早現在云はれてゐるが如き意味に於ける民族の概念は存在しない。すべてみな「すめらみたみ」として　御稜威を仰ぐ世界がそこにある。我等の日本地理學は、かゝる世界眞秩序建設に積極的に參與する、新時代創造の計畫に方向を指示する、創造せらるべき正しき歷史に指針を與へるがごときものであるべきである。この場合、我等の地理學は、もはや西洋流にポリティークの名を以て呼ばるべきものではないであらう。最近小牧實繁博士の上梓せられた『日本地政學宣言』は、このすめら地理學の使命を我等の眼前に明示せられてゐる。

（終）

ナチスの地理建設

昭和十六年六月五日印刷
昭和十六年六月十日發行

—(¥0.60)—

著作者　川上健三

發行者　北原鐵雄
東京市神田區神保町三丁目一三

印刷人　岩本米次郎
東京市赤坂區青山南町二ノ一六

印刷所　愛光堂印刷社
東京市赤坂區青山南町二ノ一六

發行所　アルス
東京市神田區神保町三丁目一三
電話九段二一七五・二一七六
振替東京二四八八八番

世界戰爭文學全集

全二十五卷

*第一卷　イリアス（トロヤ戰爭）　ホメロス
*第二卷　ギリシヤ・ペルシヤ戰爭　ヘロドトス
*第三卷　ペロポンネソス戰爭　ツキヂデス
*第四卷　ガリア戰記　シーザー
*第五卷　アイネイス（羅馬建國戰爭）　ヴェルギリウス
*第六卷　ロオランの歌（回教戰爭）
*第七卷　ニーベルンゲンの歌（中世亞細亞・歐羅巴戰爭）

＊第八巻　アーサー王物語（騎士道戰爭）　タッソー
＊第九巻　解放されたエルサレム（十字軍戰爭）　シェークスピア
＊第十巻　英國世界征覇序曲　ダンテ・ルーテル・ミルトン
＊第十一巻　宗教戰爭　コルネイユ・ラシイヌ・セヴィニエ夫人
＊第十二巻　佛蘭西王朝戰爭　ヴォルテール
＊第十三巻　シャルル十二世（北方戰爭）　シルラー
＊第十四巻　三十年戰役史　ゲーテ
＊第十五巻　エグモント（和蘭獨立戰爭）　スコット
＊第十六巻　タリスマン（十字軍戰爭）　バイロン
＊第十七巻　サルダナパラス（アッシリア滅亡戰爭）　キーツ
＊第十八巻　オットー大帝（神聖羅馬帝國戰爭）

＊第十九卷　世紀の傳說（人類鬪爭史詩）　ユーゴー
＊第二十卷　ナポレオン戰爭　ラスカーズ・ショー・ハーディ・ゲーテ・トルストイ・バルザック・ムッソリーニ・ユーゴー・スタンダアル
＊第二十一卷　壞滅（普佛戰爭　上・下二卷）　ゾラ
＊第二十二卷　ピョートルとアレクセイ（北方戰爭）　メレヂコフスキイ
＊第二十三卷　マナサス（南北戰爭　上・下）　シンクレア
＊第二十四卷　第一次歐洲大戰　編輯
＊第二十五卷　世界變革戰爭　編輯

各卷解說

歐洲戰爭文化史
歐洲戰爭經濟史
歐洲戰爭科學史
歐洲戰爭藝術史
歐洲戰爭文學史